

# アジアと女性解放

## Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先・横浜市保土ヶ谷区桜ヶ丘112  
県住公社147・五島昌子

300円

特集

### いま 戦争責任を 考える

——女の側から——

逐次刊行物

'13.1.22

国立女性教育会館  
女性教育情報センター



No.5

1978.12



訓練中の女性自衛官(1978年)

#### 性女後銃よせ装武

「女性自衛隊」の設立が、  
女性に与える影響は、  
戦時体制下の「女子挺身隊」  
と異なり、戦後民主主義の  
下で、女性の権利と責任を  
同時に果たすことにある。  
その意味で、女性自衛隊の  
設立は、女性解放の重要な  
一歩である。

竹槍ふって銃剣術(1943年)

- ★私の戦争体験〈座談会〉
- ★日本の侵略戦争とアジアの女たち
- ★反戦を貫いた女—長谷川テル
- ★軍事費拒否/反基地闘争/自衛官  
合祀拒否訴訟/韓国被爆者救援
- ★女大学—戦争に荷担した女たち

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!



■特別企画■今わたしたちは何をしなければならないか■

# 私の戦争体験 《座談会》

《出席》

今村秀子  
谷 民子  
富山妙子  
李 淑姫

(1909年生 『半月の詩』の著者)  
(1924年生 フリー校正者)  
(1921年生 画家)  
(1935年生 主婦)

亀山利子  
《司会》  
内海愛子  
富沢由子

(1938年生 元教師)  
(1941年生 日本朝鮮研究所所員)  
(1950年生 研究所職員)



満州にわたった日本人の妻たちの射撃訓練

女性進軍歌

小笠原喜代治作詞  
通堂 方 一作

一 暗れのお召に つはものの  
勇む門出に はなむけた、  
「働きます」の一言葉  
凛々しく生きて 作業服、  
妻の瞳の 清らかさ。

二 母も少女も 必勝の  
二字にあやどる 標掛け、  
兵器に祈る 勝いくさ、  
生産陣の 前線に、  
大和撫子 咲くは今。

三 馴れて愉しい この職場、  
汗を拭って けふもまた、  
隣の友を みかえれば、  
花の笑顔が にっこりと、  
若さに燃える たのもしさ。

四 心すませば わが耳へ、  
今だぞ、弾丸を飛行機を、  
送れと叫ぶ 聲がする。  
ああ國擧げて 工場に、  
いざや 女性の總進軍。

## 現在、戦争責任を考える

木は「軍国主義」で盆栽は「文化」(中国・アジア誌より)

最近、戦争の悪夢を思わせるような動きが目立っている。「有事立法」制定や、元号法制化が着々と進められて、教育の場では「君が代」を国歌として歌うことを強制されるようになった。侵略の精神的支柱であった靖国神社に福田首相がくり返し参拝し、天皇の公式参拝を実現させようとする運動も、公然と行なわれている。

「何かおかしい」と誰もが思いながら、手をこまねいているうちに、侵略戦争に突入していった一九三〇年代の状況と酷似していると、戦争を体験した世代の人々はいう。では、三〇年代から敗戦までの間を生きた人たちは何を、何をしなかったために戦争を阻止できなかったのか。二度と再び戦争をくり返してはならないと考える私たちは、私たちの親や兄弟姉妹が戦争に巻きこまれ、戦争へ加担していった歴史を、今改めてふりかえりながら「また、ふたたびの道」を歩まないために、今私たちは何をなすべきなのか見極めなければならないと思う。

三〇〇万の日本人が犠牲になった、あの戦争の悲惨さは、いくら語られても語られつくすことはないだろう。だが、日本の侵略戦争の犠牲者は日本人のみではなかった。その事実を、私たちはあまりにも知らなすぎたのではなかったか。自らの被害者としての苦しみを強調するあまり、女たちが「銃後」を守ったその銃口がどこに向けられていたのかを無視してきたのではないのか。

「国防婦人会」「愛国婦人会」などに組織された戦時中の女たちが、たすきがけで日の丸をふって送り出した夫や息子たちが、アジアの戦場で何をしてきたのか。私たちに知らされなくても、直接被害を受けたアジアの民衆は、日本軍の蛮行を受けた。

恨み続け、決して忘れてはいない。「焼きつくし、奪いつくし、殺しつくす」残虐きわまりない「三光作戦」を直接遂行したのは日本の軍隊であった。しかも戦後、こうした日本軍の犯罪を、日本の民衆の手で裁くことすらしてこなかった。虐殺、食糧の強制供出、労務者の狩り出し……戦争の傷あとは、今なおアジアの各地に生々しく残るが、被害者にたいする償いすらしていないのだ。

敗戦から三〇年経った今日、日本は経済大国としてアジアに「君臨」し、再び「大東亜共栄圏」——円プロックの形成をはかろうと懸命である。円高に誘われた日本人は、かつての日本軍が侵入したアジアの国々に工場を林立させて利益をむさぼり、観光客として札束を手に闊歩し、買春観光に血眼になっている。相手の女性が、かつて自らの手で殺害した者の遺児であるかもしれないことすら気付かずに……。

戦争責任を連合国の戦犯裁判にのみゆだね、日本の民衆の手で戦争責任者を裁き、あわせて、自分たちの戦争加担を反省することのなかった私たちは、アジアの民衆からの告発にも耳を貸そうともせずに戦後をすごしてきた。そして今、再び不気味な軍靴の響きが聞こえてくる。

だが、私たちは決して二度と被害者になりたくない。そして、戦争に加担してアジア民衆への加害者にもなりたくない。それゆえにこそ、先輩たちが侵略戦争へ動員されていった苦い経験から学び、戦争責任を問いつつ拒否するにしているのだ。戦争への道を拒否するために、私たち日本人の女は今何をなすべきかを考えたいと思う。

アジアの女たちの会

### 戦前の皇国教育

戦後、被害者意識にとじこもって戦争体験を語ってきた日本の女たちにとって、アジアとの出会いは衝撃だった。アジアをとらえる視点をもった女たちが、あの戦争の時代をどう生きたか、自分史を語り合い、再び侵略戦争に加担しないために、今何をしなければならないのかを考える。

司会 戦前に教育を受けた方たちは朝鮮・台湾・満州について、具体的にどのように教わったのでしょうか。

一九四一年には、日本軍の東南アジアへの侵攻がはじまりますが、植民地支配について、どのようなイメージを持っておられましたか。

今村 日本が神国だということを何となく植えつけられていたし、朝鮮や台湾が日本の植民地だというイメージではなく、日本の一部のように思われていた。「北は樺太千島より、南、台湾澎湖島朝鮮八道おしなべて、わが大君の納す国と、あさひの御旗ひるがえす、同胞すべて六千万」と読本にあって、唱歌の時間に歌いました。式典のときは「君が代」のほか、天皇誕生日には「今日のよき日は大君の……」、建国記念日には「雲にそびゆる高千穂の……」を歌いました。



司会 そういう歌で意識がつくられていったのでしょうか。

今村 幼稚園のときから「兵隊さんの強いこと、寒いお国で戦さして私も強い子どもです。一、二、三、四進みましょ」と習いました。侵略戦争などという意識はなく、かわいそうなところを救ってやっつたんだという気持ちでした。学校教育の中で素直に信じていたんですね。

一九二五年に女子大に入学し、同じクラスの韓国の方からはじめて、合併とは言葉の上だけで奴隷と同じだ、中国大陸侵略の第一歩として自分たちの国が侵略されたのだと聞かされました。

一九二九年に慶尚北道の大邱を訪れたときの体験は忘れられません。下関で列車から降りると、チョゴリを着た人と日本人が手を結んでいる絵に「内鮮融和」という文字の入ったポスターがはってありました。関釜連絡船の乗船手続きは、日本人と韓国人は別でした。チョゴリの白い行列が続く韓国人の乗船口では、一人一人を棒で船底に叩きこんでいました。叩かれたとたん、荷物と一緒にころんでしまったおばあさんもありました。その時は、日本人がこんなに悪いことをして、私一人だけでもおばあさんのところへ行っておわびしなければと思いました。勇気がな

くて、できませんでした。

戦争が終わっても負けるのは当たり前と思っていたし、もう日本の国政府は信用しない、私の力だけで、私の信念で立ち上がるしかないと思いました。

谷 一九二九年生まれです。小学生の作文(下欄)を今あらためて読み直すと、すっかり軍国少女に出来上ってしまっているのが、びっくりしました。私が育ったころは「支那」といえば敵、朝鮮や台湾については、血の通った人間の社会だという教育を受けたこともありませんでした。「満州」というと馬賊やバルチザンが登場し、勇気ある日本人がそれを攻め滅ぼすという「少年倶楽部」文化で育った。与謝野鉄幹が爆弾三勇士を歌ったのが流行したり、女学校の運動会では「抜刀隊」の歌のテーマで分列行進をしました。この曲は今でも自衛隊や警察の分列行進に使っていますね。

一九三五年ごろ大学を出た従兄たちが、不況で日本に職がなく、朝鮮の城津の製鉄工場や台湾の日系ビクターで働くなど、植民地へ出て行きました。日本軍の三光作戦のことを彼らがひそひそと話しているのを聞いたことがあります。

学校では「満州」は日本の生命線、地味の肥えた広い国土があると教えられ、そこが「満州」の人々の



## 今の日本 宇佐見たみ

二月二十四日まで、スイスのジュネーブで、こくさいれんめいがひらかれました。日本からは代へうとして、松岡さんや松平さんや、其の外えらい方がたくさんいらつしやいました。こんどくりつしたまんしゅうは支那の物だと外國は皆言つて居ます。どんしてかといふと支那は先に支那の方がいいというまく言つてしまったからです。

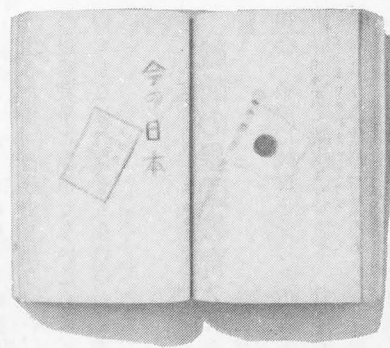
二十四日のごう外に、松岡さんのおしやんが出て居ました。

日本はもうだつたいたそうです。支那はしやくな國です。

今支那とまんしゅうとせんそうをして居ます。せんそうのもととは支那が日本のでつ道をこはしたからです。支那はまんしゅう人にいたづらをしたりするので、日本はまんしゅうにかせいで居ます。

日本の軍人さんやまんしゅうの軍人さんは、何尺とつもつた雪の中で、其の上もうこからふいて来るさむい風の中で、いさましくはたらいていらつしやいます。けつしてへこたれ

ものだとは考えもしなかつた。朝鮮も、国土は荒れて禿げ山で、日本のような緑はない、日韓併合後は植林



はしません。  
昨日の新聞にネッカへ行く日本のへいたいさん方のおしやんが出て居ました。  
(ネッカはせんそうをして居る所)  
私がおほきかつたら、日本の事で何かおやくにたつことをしやうと思ひます。日本のへいたいさんにくらうをさせないで私たちもいつしよになつてはたらかうと思ひます。  
今にどんなことがおこるとはかぎりませんから、日本人はかくごをしなければなりません。  
日本ていこくばんざい。  
(一九三三年 正月十七日 記 小学校二年)

で山は緑になり、米はたくさんとれ日本にうんとくると教えるんです。蒙古族や朝鮮族が民族衣裳を着て、

ほほえんでいるポスターがあふれ、豊かな大地に各民族が共に栄えるというイメージです。

司会 富山さんは「満州」での生活の中で、さまざまな矛盾を感じていらしたと思いますが。

富山 私は日本が中国を侵略していた一五年戦争の時代「満州」で育ちました。

大連の小学校の遠足といえば旅順に行き、日露戦争の戦跡めぐり——そこでロシア帝国がいかに悪らつに極東へ侵略したかを、先生が熱をこめて語ります。そのロシアの野望を日本はくじいたのだと、西洋帝国主義をやっつけるわけですね。  
「日本軍は大国ロシアを向うにまわ



結婚式会場に向かう「大陸の花嫁」たち

小学生は駅に「討匪行」の兵隊さんを見送ります。そこで関東軍は匪賊を討伐し、そのおかげで「満州」は王道楽土になったと、戦争にはやはり民衆を引っぱるスローガンがあるわけですね。  
いったい日本が中国侵略で何を行ったか——

「南京虐殺」や「三光」など、当時の日本人にはまったく知らされてはいなかつたのですから。

谷 私たちは王道楽土を相当部分信じていたわね。満鉄の宣伝映画をずい分見せられたから、今でも目をつぶると、大豆がザーツとこぼれるイメージがはつきり浮ぶ。ひどいことがあつたなどと想像もしなかつた。

## 被植民者にとっての戦争

司会 李さん、植民地朝鮮では日本人をどう思っていたのでしょうか。

李 ちようど私が小学校入学の年から韓国語は禁止され、日本語だけ使うことになりました。もちろん家庭では、自分の国の言葉でしたが。

戦争が始まるとすぐに巡査が各家庭に来て、鉄製の品物は全部とりあげられました。韓国では御飯茶碗スーブの容れ物など、すべて鉄製でお父さんの器、お母さんのものと決まっています。鉄製の洗面器に至るまで、祖先から何十年、何百年と伝わってきた大切なものを全部とられました。一村に何キロという割当てがあつて、日本人と韓国人の巡査が一緒にやってやるんです。

戦争がひどくなると、食物やお金までとられました。自分の畑仕事は後回しにして他所の畑で働いて得た

金を日本の国に差し出すんです。小学生は松の根やアカシアの実など、油のとれるものを集めさせられた。校庭の周囲にも、そういう植物を植えさせられたりで、勉強する時間がなかつたです。

私の家庭は、李朝時代がそのまま流れてきているような封建的兩班(ヤンバン)の家でした。私が幼いころは七才以上の男女は同席が許されないほどでした。日本の植民地になり、おじいさんたちは髪を短かく切られ、創氏改名で日本の氏名に変えさせられた。反対ノ反対ノと叫んでも、捕えられて、ひどい目に会うからどうしようもない。

男の人たちが兵隊にとられたころのことで一番印象に残っているのが痛むのは、若い先生たちが一人ずつ戦争に行つたことです。授業中に鐘がカーンと鳴ると、生徒は校庭に集められるんです。すると先刻まで教えていた先生が、胸に白い札を貼つて立っている。その先生が軍隊に行くことは皆に分かるので、心の中で泣きながら「勝つてくるぞと……」と歌って拍手で送り出すんです。そして二ヶ月も経たぬうちに死んで、遺骨だけが真白な箱に入つて戻ってくる。ほんとに辛かつた。

司会 おじいさんが三・一独立運動で亡くなられたそうですが、ご両親



からお話を聞かれましたか。

**李** 豊臣秀吉の侵略のときに、山が高く日本兵が入れず涙を流して退却したといわれる「涙流す山」という名の山があります。私たちの小さい村にも三・一運動が及んで来て、人々は韓国の旗を持って集まり、万歳万歳と合唱して、その高く険しい山に登って、少し大きい町へ向かった。日本軍はその山まで入って、人々を全部捕えて、殺したり監獄に入れてしまった。おじいさんも田舎で捕まって、ソウルが一番大きい監獄に入れられたそうです。監獄の中で漢詩をつくり、田舎の息子（私のお父さん）に送り続けたということです。

**司会** 両班（ヤンパン）の家庭の中で、日本のことはどのように教えられましたか。

**李** おばあさん、お母さんたちには、豊臣秀吉の侵略時代のことと言ひ伝えられている。そのお母さんから学んだことは、日本人は昔から侵略者だったこと、わが国は今植民地化されているが、いずれ独立してはいけない。五千年以上の歴史をもつ白衣の民族として、自分の国に誇りをもって、自分の国の言葉をちゃんと習って勉強してはいけないということでした。李朝時代の王や王妃の話を、姉と二人で泣きながら「も」として、もつとして」とせがんで

聞かせてもらった。

学校では日本語だけでしたが、お母さんからハンゲルを教えてもらった。男の子たちは五、六才までに漢文をマスターしますが、女の子には教えてくれなかったんです。封建的ですけど。そういう伝統的、封建的なものが、日本の支配以後どんどんなくなつてしまつて……。そういうのを喜ぶ人もいたんです。近代化を喜ぶ親日家。

**司会** どういう人が親日家ですか。

**李** やはり新しい学問を習った人たちですね。両班といつても貧しい人も裕福な人もあり、その中間ぐらいの人です。人の家の奴隷にはならないというレベルで村を出て行って現代の学問を習つてきて、真つ先に髪切つて、ステッキ振りながら歩く。こつちでは昔の黒いもの被つて、長い韓国服着てね、両方あったんです。

**司会** そのころの教科書は？

**李** 日本の教科書を使い、毎朝、皇国臣民の誓詞とか宮城遙拝をしました。戦争が終わると、日本の本は読んではいけない、持つてはいけないということ、全部焼きました。

**司会** 八・一五の解放をどういう風に迎えましたか。

**李** 戦争が終わつたときには、みんなが嬉しい嬉しうすけど、第一線はどうしようもなく日本に従つてい

た人々への怒りがひどくて、日本人の手先になつて同胞をいじめた人々を棒や石で叩いたり、半殺しにしたりした。日本人よりも手先になつた韓国人への憎しみが強かつたわけではないのです。日本人はみな逃げてしまつて村にはいなかったから、収まらぬ怒りが韓国人に向けられたと思うんです。

八・一五の放送のことは、兄が戦争に行く送別会をしているときに、そのニュースを聞いたらしいんです。走つて家に帰り、戦争に出発する人のために庭の木に吊つてあつた旗を全部下ろして、お母さん、もうこれ要らないよ、戦争に行かなくてもいいよ、戦争は終わった、うちの国は独立した、解放されたと言つたんです。お母さんは兄が軍隊に入るといふとき、泣いて泣いて千人針を一針ずつもらつて歩きながら、神様、神様、叫んでいたらいいんです。兄が軍隊に入る二日前に戦争が終わつたのでお母さんは、これは神様のおかげだということで、代々伝わってきた儒教で祭つていた飾りものや器を全部下ろして割つてしまつて、その日のうちに教会に行つたんです。

都会には、日本人だけが通う学校があつた。朝鮮人はなかなか入れず、入つても差別される。そういう学校に入つたお嬢さんたちは、恵まれた

家庭でお父さんが立派というわけですけど、えばつてましたから、解放後は逆に嫌われましたね。居にくい人になりました。

### 加害者側に欠落するもの

**亀山** 私は小学校一年生が敗戦から一番自由な世代で、民主主義という言葉もフランス革命も知つたけれど、アジアを忘れ、ヨーロッパ中心の感覚から抜けていない。例えば中国の五・四運動の写真を見ても、私たちと同じ血の通つた人間として彼等を見る教育は受けなかった。

アジアの人々の存在を初めて実感したのは、教師として担任したクラスの日朝鮮人少女が朝鮮高校に転校後に遊びに来て、秀吉の出兵のころと祖国防衛戦争で習うのよ」と話してくれたときです。秀吉の朝鮮出兵は私たちにとつて、桃太郎の鬼退治みたいにカッコいい感じなのね。その子の言葉に初めて、日本人が攻めていった土地の人たちに生活があり、涙や汗があることを生き生きと感ずるようになった。今の教育では、知識を与えないだけでなく、感性をまひさせることが、自覚を妨げる有効な手段になつていふんです。

**谷** 台湾からの留学生、劉彩品さんの法務省入管局にたいする闘いの支

援活動の中で、私は初めて日本政府の外国人にたいする扱いを見、血肉の通つた中国人、朝鮮人につきあふことで、自分の問題として何とかしなければと思いました。法務省や入管の役人のいやがらせにたいして彼女は「これは日本人であるあなたたちの問題よ」と執拗に言つたわけ。それまでは、警察から外人登録の切りかえがくる韓国人の子にたいしてかわいそうにという反応だった。同じように自分の問題だと思つたのはアメリカの北爆のときね。アメリカはベトナム人を人間とみていないから、虫ケラのように殺す。日本も中国に固有の名をもつ人々が住んでいるとも、自分に関係があるとも考えなかつたんですよ。

**富山** のちに私がいたハルビンにはロシア革命で亡命してきた白系ロシア人がたくさんいて、女の子が花売りなんかしていた。ハルビンの女学生は詩や短歌では「エミグラントの青き瞳よ」などとロシア人の貧しさには同情しても、もつと悲惨な中国人にたいしては無関心だった。彼ら人間を思つていなかったわけですからアメリカの白人が黒人を同じ人間と思つていなかったように。

**内海** 二年前にインドネシアで暮らして、その日本人学校の作文集を読んだときのショックが同じなん

です。インドネシア人誰それ君という固有名詞が全然出てこない。インドネシア人は裸で歩いて、手でご飯を食べます。ぼくはこれを家の女中をみて書きましたとか、家の犬は日本人は誰がきても吠えないが、インドネシア人だとすごい勢いで吠えますとか。あなたは誰と遊ぶかと聞くと、オーストラリア人、ドイツ人、アメリカ人で、カンボン（地元の人たちの部落）には行かない、汚ないからと言ふんです。

**谷** 物と同じというか、本当にどうしたらいいんだらう。

**内海** 子どもたちは、外国で仲良くするには、その国の言葉を覚えるのが大切だとアンケートには答えるが、インドネシア語を勉強する人は一割もいないですね。



朝鮮の各所に神社をつくり参拝を強制した

**亀山** 戦時中にソウルの女学校で教師をしていた方が、何人かの生徒が心を打ち開けてくれて、私たちは日本語を使わなくてはいけませんが、先生はなぜ朝鮮語を学んでくれないのか、朝鮮の文学の美しさを先生に知つてほしい」と涙をハラハラこぼしながら告げられたときのショックを言われてました。この言葉のもつ意味は今も変わらないんです。

**内海** 今は植民地ではなく、合併企業の社員として行くんですが、それでも言葉はやらない。言葉がわからないから、日本人だけ集まつて生活し、インドネシア人が怖ろしくみえる。インドネシア人は泥棒や人殺しをするという会話だけが増幅される。それを子どもが聞いて、もともと「遅れたアジア」のイメージがあるから、どうしようもない国だという思いだけが伝わっていく。相手の文化を知るといふ姿勢は今も全くない。

バンドンの大学で日本語文化祭をやつたときに通訳をした日本語学科の先生は「私たちは日本語学科で日本語を勉強している、インドネシアで暮らしている日本人はインドネシア語を習う義務がある」と皮肉つた。彼は日本へ来て、日本語が上手なのに意識的に使わない。それが彼のナシヨナリズムなんですね。

### 戦後教育の現場にみる国家意識

**司会** 日本の普通の学校教育を受けただけではアジアの問題、植民地として支配した朝鮮・台湾のことすら意識にのぼらないわけですから、中学や高校の教員だった亀山さんのご経験はどうですか。

**亀山** このテーマを聞いたときに、まず思い出したのは、対華二カ条（一九一五年、内モンゴルまで含めた權益を日本が要求）についての授業で、



中国はそれを呑んだ日を国恥記念日として教える、必ず笑いが出たこと。良いことではなく、恨みを記念するのが、日本人の体質に合わないらしい。しつこいなあと云うのね。アジアに生きている生身の人間、生活を実感できないのです。李 朝鮮が日本に併合されていて、解放されたという記述は、日本史の教科書にないのですか。

亀山 私たちには敗戦の日だった八月十五日が、日本の支配下にあったアジアの民族にとっては解放の日であつたことを指摘している教科書は少ないですね。小学校六年の教科書の日華事変のさし絵の説明に「中国の広い国土と中国人の抵抗のため、戦争は果てしなく続きました」というのがあります。「悪い支那ばかり」という発想は、戦後もそのままです。教科書検定は憲法違反と国を訴えている家永三郎さんは「日本軍は北京、南京、漢口、広東などを次々に占領し、中国本土に戦線を広げたが」という箇所を「戦線が中国本土に広がった」に直せと言われました。家永さんは、戦線が自動的に広がることはないとして訂正を拒否していますが、アジアへの加害の史実を隠そうとする大きな流れを感じます。

一九五五年の小学校六年用教科書は日露戦争について「北の方からロシアが同じように南満州をねらつていたので、一九〇四年には二つの国に戦争がはじまりました。中国の領土へ攻めこむのは、日本もロシアも同じことなのに、日本国民の多くは、これを正しい戦争だと思つて戦いをつづけた」と書き、幸徳秋水や内村鑑三の戦争反対、「ここはお国を何百里」の歌が国内でも戦地でも歌われた事実など、反戦や厭戦の風潮の記述も少しは残っていた。同じ教科書が一九六五年には「わが国は、これまで、いくどもロシアと話し合いましたが、このままでは朝鮮もわが国もせんりやうされてしまふと考へ、一九〇四年やむをえず、ロシアと戦争をはじめました」という記述に変わります。市民や植民地をねらうロシアと日本という記述から朝鮮とわが国をまもるためにロシアと戦争を始めたという論旨が変わつたのです。これは戦中の一九四三年の国定教科書「しんしんしん」のわが国も事ここに至るや、帝国防衛と東洋保全のため、決然と国交をたちました」と全く同じ文脈ですね。

文部省の要求例は「本土空襲や原子爆弾、焼け野原の広島や傷ついた兵士の写真は暗い、出陣する学徒、工場で働く女学生の写真など、戦争に一生懸命協力している明るい面を描くのが好ましい」といつてます。領が参考から国家基準になり、教科書検定がきびしくなつて教育内容を選ぶ自由を奪われ、教員統制も強まるという形が貫かれていきますね。

### アジアからの告発

李 韓国の教科書には三・一運動も柳寛順(ユガンスン)の話も載っています。だから戦争を全然体験しない子どもでも、日本という国について知つてます。うちの

子たちも、日本にくのはいややと言つて反対したんです。日本大嫌いと。日本に来ていろんな方と付き合ううちに、変わってきましたね。だからお互いに隣国として行き来して、実際に見て、聞いて、話すことが大事だと感じますね。

司会 そこが大事ですね。ただ行くだけなら、年間六〇万以上の日本人が韓国を訪れるが、大部分はキーセン・パルティが目的です。韓国の人々は彼等には心を



朝鮮人が「日本兵」として徴兵された

戦争の被害とアジアへの加害だけでなく、歴史の中で民衆が下から抵抗した事実はすべて、徹底的に隠しています。司会 戦前の植民地支配や現在の経済進出を、生徒たちはどのように受けとめていますか。亀山 経済大国意識や国家とはよいものという感覚が育っています。一九六〇年代は、憲法を大切にするとする意図があり、君が代を歌うのを拒否することの意味も分かっていた。七〇年代に入つておかしくなつたと思います。これは一九六五年の「期待される人間像」で天皇を愛することは国家を愛することという形で天皇と国家が急上昇してきた時期で、教師が自由にものを言えなくなつたことが影響していると思います。

司会 戦前は国家は天皇の支配によりかかつていたが、現在は君が代を歌うことで国を愛する気持を表すという一見「自然な形」で、計画的に国民に強要している。これにたいして抵抗は非常にあるが、一般的にこれに替える歌、自分たちの国家観がないのではないかと。亀山 私から上の年令の人たちは、国家や集団にたいするアレルギーがあるが、若い人たちは逆にそういうものに飢えている。理論や行動で素直に動けないときには、神秘的なものでなんとか満たそうとする。高校生の男子にレポートを書かせると、ヒットラーへの関心を持つものがすごく多い。自分にはできぬスカツとしたことをやれた人という羨望が、受験戦争が激しくなるほど出てくる。

### 太平洋戦争開始当時の音楽と音楽家

戦時中の音楽家の戦争協力、迎合への姿勢を考える時、日本の楽壇が常にいう「政治」と「音楽」は別だという考え方が、いかに安易なものであるかということとを覚えてくれる。

一九三〇年代、エログロナンセンスの流行歌は戦意高揚することができぬとして、流行歌抑圧方針を出す。レコード業者、音楽家達は、商業第一主義から奉公主義へと改める。

一九三七年、日中戦争の拡大、国民精神強調運動の中でNHKの委嘱により「海ゆかば」が作曲され、また政府は「愛国行進曲」を一般募集。この頃になると出征兵士を送る歌に変化が現われ、「戦友」は厭戦的だとされる。日本文化連盟は「世界に我が文化の発揚を計らんとする折から真の国民音楽樹立といふ一大音楽運動を起すべきである」という「日本の作曲」運動を起す。日本の作曲家達の方方は、組織されていった。

一九四一年、太平洋戦争に突入。内閣情報局の「音楽は軍需品なり」の主張を受け、山田耕作を隊長とする音楽挺身隊なるものが結成され、楽壇の自由主義的分子並びにユダヤ系音楽の弾圧を、軍の圧力を借り行う。日米開戦日のNHKの音楽は「東亜の暁雲」「征伐太平洋」「闘志」「戦勝」「正義の鋒先」等々。(安田恭子)

半月の詩 木村伊佐  
定価・300円  
発売・新教出版社  
新刊新小町3の1



# 日本の侵略戦争と アジアの女たち

## 日本名から朝鮮名へ

戦争も終わりに近ずいた一九四四年四月、東北の一ノ関近郊に住んでいた叔母の家へ、妹と二人大阪から疎開をしました。当時私は国民学校現在の小学校六年生でした。大阪では、在日朝鮮人が多かったため、創氏改名の政令によって、日本姓を作ったのですが、金姓で通っていました。しかし、排他的な農村に行くのだからと、親の配慮と先生のすすめで、日本姓を名のりました。叔母の家では、大阪のような食糧不足もさほどなく、釜石の艦砲射撃される大砲の音も遠く、警戒警報のサイレンの音で防空壕に入り、非常時の食料として携帯しているいり・米（醬油や塩の味つけがしてある）を壕の中で食べられるのが大変楽しみでした。

八月十五日のその日、私は床屋で少年雑誌を読みながら順番を待っていました。大人たちはラジオを聞いていました。突然騒々しくなり、「日本は負けた。朝鮮人は三等国人になって日本人は四等国人になる、朝鮮

人なんかやつつけろ」などの声を耳にした私は、夢中で外にとび出しました。「早く逃げないと殺される」と叔母さんに叫んだのでした。そしてしばらくして、なぜ負けたのだろう？日本は天皇陛下のいられる神国なのに。どうして神風が吹かなかったのだろう？そんなくさい思いで一日中泣いていました。そのときは何の矛盾もなく、自分は日本人、皇国の民だったのです。

戦争の恐ろしさよりも、差別への憤りの方が強かったのです。

疎開して間もなく、金姓の縫い取りのある防空頭巾がクラスメートの目に触れ、ひそかに恐れていたことが現実になったのです。次の日から、毎朝校内で二〇人位が待ち構えて石を投げつけるのです。教室では、歴史を教える先生が、朝鮮人である私を見据えながら関東大震災の話をします。そのたびに、生徒たちは私をジロジロとふり向いて見るのでした。いつもいじめられることを恐れてピー

## アジアの教科書で 見る日本軍国主義

韓国・中学校「国史」

第二次世界大戦が熾烈になると、我が国の若ものたちに志願兵制度を実施して強制的に志願させ次には、徴兵制度まで実施して強制的に戦線にひっぱたいて行き、多くの人々を徴用で、戦場や工場、鉱山などの地に引きずって行った。

このように、我が民族はあらゆる圧迫と強要にも屈することなく、終りまで日帝に抵抗し、民族精神を守ってきた。日本のこのような我が民族抹殺政策は、かえって、我々の民族精神を高め、団結を固くする結果をもたらした。

……日帝が我が民族に実施した教育は、基礎知識を教える普通教育と初歩段階の技術を教える実業教育にすぎなかった。このことは彼らの教育目的が我が民族の指導的人物の養成にあるのではなく、植民統治の下働きをするものを育てることにあつたためである。その後、学校を増設し、ソウルに大学まで建てたが、教育を実施する基本原則には変りがなかった。こうした教育政策の下にも先覚者たちは日帝弾圧と戦いつつ、伝統的な私立学校を建てて人材を育てた。（第八章「日帝の侵略と独立闘争」7民族の文化闘争より一九七七年版）（山口明子 訳）



大日本朝鮮人救済会分會館前 納記念

とって解放の日だったのです。父母の生きざまを振り返って戦争とは何か。父母の歩んだ道は決して自ら選んだものでなく、強制されたもの、自分の子でありながら、日本人になりたがった子供たち。父母の中の祖国と子の中の祖国とは？朝鮮とは？日本とは？家族とは？女とは？日本籍を持たず、日本で生活している私の八月一日は遠く消え去るものでなく、むしろ日毎に重く迫ってきます。

（金順烈）

写真・朝鮮の国防婦人会の女性たちが朝鮮人の家庭を予告なしに訪れ、食事中に食卓や食器を全部献納させて道庁の庭に運び、記念写真をとった。

川村栄子さん所持

## 私がみた台湾の八・一五

日本の敗戦を私は疎開先の寒村で迎えました。新聞やラジオ等なんにもなく、米軍の飛行機もあまり飛んで来ないへんびな田舎では、じつところ敗戦のニュースはかなりあとになってからわかったのです。ですから八月一日のことについてはほとんど記憶にないが、その前後の思い出でしたら、かすかながらいろいろと憶えています。その年の四月、私

は都会の中学に入學しましたが、しかし連日の空襲と爆撃で勉強どころではありませんでした。私達は各自の田舎に帰り、その地方で編成された学徒隊の勤労奉仕に参加して毎日を送っていました。鎌をかついで農村に出かけ、畑仕事の手伝や、インドレンセイを植えさせられた記憶は今もなお脳裏に強く残っています。そして戦争も末期になると勤労奉仕



戦時中 徴用された少女

も中止、私は祖母や弟妹達と疎開先へ住み移りました。疎開先は戦争を忘れさせるほど辺りな寒村で、もちろん電気、水道もありません。小川の小魚をすくって常食にしたり、薪の足しに甘蔗の枯葉を集めたりして過しました。マリリヤにかかって高熱と寒気にさいなまれた苦しい思い出は、なかなか忘れられません。食糧は配給制でしたが、農家の人達が時々官憲の目をかすめて家畜の闇肉を売りに来ました。お米も足りない場合は農家の知人から粃を手に入れ、これを竹筒に入れて鉄棒でつつけば脱穀して玄米がえられるので、十分ではないが少くとも食糧にはあまり不足しませんでした。やがていつの間にか戦争が終り、時代は大きく変わっていききました。町にもどると終戦に安堵し、「台湾光復」（台湾の祖国復帰）を喜ぶ空気が町中にみなぎっていました。人々は新政権に対す

## 台湾・中学校

一、日本盗賊（軍隊）の南京大虐殺  
民国二十六年十一月上海陥落後、日本盗賊は西へとおし進み、十二月南京を陥落した。わが国民政府は事前に西から重慶に移しており、死をかって戦い抜くことを宣言した。日本軍閥は南京に侵入占領後、狂った野獣の如く血生臭い大虐殺を行い、この首都の三十万の罪なき民衆を残酷な毒手につか……ある者は銃殺、ある者は生き埋め、ある者は川に投げこまれ、ある者は日本刀で頭を切り取られた。婦女は強姦され、財産はすべて奪い尽くされ、首都は空前の大災難にあった。

人類史上最も非人道的な一ページとして、わが中国民族一の大いなる恥辱のみならず、全世界を愛する民族も日本盗賊の獣的蛮行に非難の声を挙げています。

二、日本の台湾占領時期の台湾同胞に対する迫害

日本は日清戦争後台湾を占領、「六三法」を公布し、立法、司法、行政の三権によるいわゆる「台湾総督」の手により高圧的な植民地統治を行った。占拠当時は台湾同胞は度々奮起し、武装して抗争したが、前後十数回のうち最も有名なのは民国四年の噶吧年事件で……この事件と関連



る期待と不安の中で、やがて進駐してくる「国軍」(蔣介石の軍隊)の歓迎の準備であけてくれていました。中学では日本人の先生と入れかわって、台湾人の先生が教壇に立ち、私達には漢文を、日本人学生には台湾語を教えていました。だがまもなく日本人の学生も学校に来なくなりました。そのころ引揚げていく日本人

## マレーシアでふれた戦争の傷あと

この九月、マレーシアの美しいリゾートの島ベナンで開かれた「環境の危機シンポジウム」に参加した。どこまでも青い空、緑のヤシに包まれたこの島は、旧イギリス植民地だったが、第二次世界大戦中は、日本軍が占領するという血なまぐさい歴史を秘めていた。

シンポジウムの合い間に、島で最も高いベナンヒルという山へケーブル・カーで登った。途中の乗りがえり、眼下に広がる島と海の美しさに見とれていたら、ケーブル・カーの運転手が親しげに話しかけてきた。島の生まれのマレー人で、戦争のことを聞いてみたら「日本の小学校に三年半いた。授業は日本語だったが、もう忘れてしまった」といい、突然「見よ、東海の……」と歌い出した。歌詞はあやふやだったが、メロディ

が大通りの両側に家財道具や書籍を並べて売りさばっている痛々しい光景は、日本の台湾植民地統治の一つの時代の終りを告げるかのよう、未だに生々しく私の心底に深く焼きついていきます。しかし思い返すに、八・一五日は日本人以上に私の人生と私達の生活を変えたといえるかも知れません。(張 芳秋)

はちゃんとおぼえていた。「日本人の先生はやさしかった。でも、悪いことをすると、日本人に両手を切られるのでこわかった」と両手を切り落とすしぐさをした。そして「もう昔のことだから。最近では日本人の観光客がずいぶん来ますよ」と、商売熱心な顔になった。

再びケーブル・カーで下山し、車を拾って町の方へ走り出すと、五分もしないところに、高さ十メートルもあるかと思われる大きな石碑が見えた。以前から聞いていた中国人殉難碑だ。暗くて碑銘は読めなかったが、夕闇の中にそそり立つ碑はこの地で、日本軍に命を奪われた何千人という中国人が今なお無言の告発を続けているかのように見えた。碑のまわりで夕涼みしている近所の中国人たちの視線にけわしいものを感じた。

シンポジウムで観光公害についてきびしい報告をしたエブリン・ホンさんという二十七歳の中国系女性に「これから一緒に買春観光反対の闘争をしよう」と意気投合し、「アジアの女たちの会」についても説明した。「私たちは日本の女として、アジアへの侵略の歴史を繰返してはならないという気持ちでがんばっています」というと、彼女は私の手をギュッとにぎりしめた。「戦争のことを思うとつらいんです」と急に涙声になり「両親から日本人がどんなにひどいことをしたか、子どものときから聞かされてきた。親せきの人が日本女性と結婚するといひ出したとき、両親は猛反対した。中国人をあんなに苦しめた日本人との結婚など許せないというんです。あなたたちのように、戦争のことを反省している日本人もいることなど考えもしなかった」と涙を流し続けるのだった。

マレー人と中国人では、戦争についての受けとり方はやや違う。イギリス人が植民地支配のために、人種対立を深める政策をとったことを受けて、マレー半島を占領した日本軍も、マレー人には懐柔策を、中国人には弾圧策を、という分断政策でのぞんだのである。中国人は祖国を日本軍に踏みつけられていることへの憤りもあって、きびしい抗日運

して虐殺された台湾同胞は数万人以上にとぼる。全台湾人民は日本軍閥の暴威の前にやむなく屈服した。日本軍閥はわが台湾同胞に極端な差別待遇を行い、教育においては彼らの「天皇」を尊重する思想を植えつけわが国の民族意識を消滅させた。更に台湾青年には高等教育を受けさせなかった。

また、経済的には台湾同胞の生産所得の大半を剝奪し、生活は非常に困難に陥った。これによって台湾同胞の祖国への思いは切なるものがあった。(一九七五年版)(三宅清子訳)

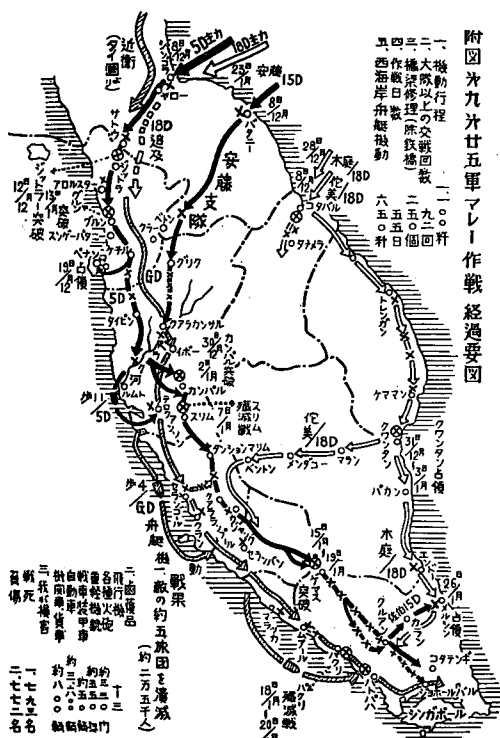
二節 日本對我國的侵略和榨取

第一次世界大戦爆發後、我國最初民國三年出兵山東、進攻德國的租借地、北平政府沒有能力阻止、祇得不得越界西犯、以破壞中國的中立。那爾續向西侵略、次第占領膠濟鐵路的全取得在山東的特權、把山東變成日本的戰後得到國際間的承認、因此產生了所謂自兵侵犯山東以後、我國屢次向及而在民國四年初突向北平政府提出苛不繼承德國在山東的所有權益、並享有和南滿、安奉兩鐵路的租借期限至九十年兩國合辦漢冶萍公司、附近的礦山中國租借或割讓給其他國家。(中國政府

動を買いたこともあった。このため中国人虐殺は各地で行なわれ、私が以前マレーシアを訪問したときも、折にふれて、中国人殉難のことを知らされた。たとえば、クアラランブル郊外のボタンカリというところを通ったとき「ここで二万人もの中国人が殺された」と聞かれ、またポート克蘭へ向かう橋を渡ったとき「この橋のらん干には、日本軍に抵抗して殺された中国人の首がズラリとさらしものにされた」といわれて、言葉もなかった。

日本の教科書には、第二次大戦のことにふれても「マレー半島」という地名が出てくればよい方で、ここでどれだけの血が流されたか、などの説明はない。一方、マレーシアの教科書には「日本の戦争」という章で、何ページにもわたって、日本軍国主義によって受けた被害が記述されているのだ。

侵略した国と、された国のこのギャップ。マレーシアでは、空港や観光地で、何組もの日本人団体客を見かけたが、一体彼らの中で、殉難碑に気づいた人は何人いたろうか。戦争のことなど忘れてしまっているかのようなしやぎ方であつ歩いてきた。恥ずかしい日本人の群である。恥ずかしいのは、過去の軍事侵略だけではない。殉難碑がひっそりと



日本軍は1942年12月上陸、42年2月15日シンガポール「陥落」(「シンガポール」辻政信著より)

ある町に、ソーニーやトヨタや味の素の巨大な看板がわがもの顔に林立し、現在の経済侵略を象徴しているからだ。シンポジウムの一日、ベナンからフェリーで対岸に渡り、クアラ・ジュルーという小さな漁村への現地調査に参加した。私にとっては、昨年に続いて二度目の訪問であった。近くにできた日系企業の多いプラヤ工場団地からの排水のために魚がとれなくなつて、生活苦に追い込まれているという貧しい漁村であった。さらに驚いたことは、日本の公害輸出の被害を受けているだけでなく、かつては日本軍に踏みつけられたことがあるという。わずかに数十世帯のマレー人の小さなカンボン(村落)が、日本からの軍事侵略と経済侵略の犠牲になつ

ているのだ。この緑あふれる熱帯の国の穏やかなマレーシア人にとって、日本は不気味な経済大国に見えるのも無理ない。

「日本はこんなにくさんの工場や製鉄所を作つて、それを守るためにいざとなったら軍隊を送り込んでくるのではないのか。日本の軍国主義は復活しないと保証できるのか」クアラランブルで中国系ジャーナリストにこう問いつめられたとき、私は答えることができなかった。アジアの人たちが抱き続けている日本への恐怖は、過去の血塗られた体験に根ざしているだけに、容易に消えるものではないことを、アジアを旅するごとに思い知らされる。(松井やより)

マレーシア・中学校

民衆の特別な憎しみを買った軍支配の一面は、日本の軍事警察である憲兵隊の力で、憲兵隊は逮捕、捜査拷問の権利をもち、それが忠誠を尽くさなければならぬのは、東条首相ただ一人に対してだった。日本の軍隊は、侵略当初の彼らの兇暴性によって、すでに現地住民の大部分を離反させてしまった。日本軍政の残忍性は、日本人を愛さるようにはしなかった。

文化的には、日本はその新帝国のなかで、「アジアの光」を気どった。日本の支配は一般に厳しかった。東南アジアの全民族の民衆は、ある程度はそれの影響を受けたが、中国人たちがみんなのなかで最悪の取扱を受けた。日本支配の初めは、中国人にとっては恐怖の日々だった。彼らの処刑に使った残忍な形式は……日本軍の残忍性について書いた本……の中にまなましく叙述されている。日本軍の占領期間中のいろいろなときに、ほかの同様なみせしめが行われた。この「取り除き」方法は、婉曲に「粛清」と言われるようになった。多くの中国人が虐殺されたのである。(一九六三年版)



## タイに残した日本兵の爪跡

ナコンシータマラート

数年前、日本にきていたタイの留学生に、あなたの故郷はどこですかと聞いたことがある。

「ナコンシータマラートです。日本軍がタイに最初に上陸したところですよ。」と言われた時、頭をガーンとやられたような気がしたものだ。私はその事件について全く何も知らなかったからである。

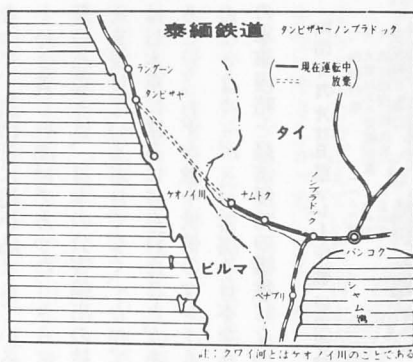
一九四一年一月八日未明、日本軍がバンコックと南タイのナコンシータマラートとに上陸しようとして迫っているとき、当時政権を握っていた親日派の軍人、ビブン首相が失踪し、日本軍は上陸許可を得られないまま強行上陸し、タイ軍と衝突して多くの戦死者を出した。

そもそもタイ国は太平洋戦争では直接その戦場とはならない国であったが、日本にとっては戦略上きわめて大きな意味をもっていた。それは日本が列強により経済封鎖にあつていたのであり、ために、タイ国は日本の戦争重要資源である米、ゴム、錫を獲得するルートであると同時に、マレーやビルマ戦線のための大作戦基地であり、列強やマレー、ビルマの情報収集する諜報戦の焦点であ

った。したがって、開戦前から得体的な知れない日本人のタイ潜入は頻繁であったという。

強制労働を強いた日本兵

「戦場に架ける橋」で有名なタイ東部のカンチャナブリ県にある橋は、日本軍がビルマ戦線に物資を運ぶた



めに建設したもののだが、建設現場では強制労働につかされた連合軍捕虜、インドネシア人、マレー人、中国人、中国人の労働者達のうち、過酷な労働と熱帯の疾病のため、四万人以上がバタバタと倒れ、死んでいった。中には相当数のタイ人の下層労働者も含まれていたのである。

ピサノローク、ランパン、チェンマイなどの北部タイの村々には、イ

ンパールへ入るため、日本軍が駐屯し、米、家畜、食糧などを調達した。日本軍はビルマへ通じる山中に道を作らせるため、突貫工事に村の人々を徴用した。村に日本軍が入ってくると村人達は恐ろしさで家を捨てて山へ逃げ、妻子をかくまったという。少女がかわいがついていた馬を奪い、病院から医師を追い出して野戦病院とし、誰かれかまわず労働に就かせて日本語を強いた。チェンマイの街に遊びに出ては女を買うのも日本兵の常であった。

敗戦の年に子どもが生まれ、父親である日本兵の名前までわかつているのに父を探しに日本へ行く夢も果せないままに、チェンマイの市場で今日も働いている女性がいる。

ビルマにおけるインパール作戦は惨憺たる敗北に終り、チェンマイの県道沿いには日本兵の屍が累々と続き、チェンマイの野戦病院でも四〇〇名が死んだ。

敗残兵は、タイ、ビルマ国境に住む山岳民族の村へも落ちのびていった。あるカレン人の女性は次のような話をした。

「カレン人は大変日本兵を恐れていました。彼らは血まみれでしたし、色々な病気にかかっており、ものすごい悪臭がしました。そして飢えて死にそうでしたが食糧と交換するも

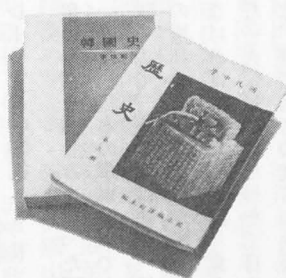
タイ・中学校

日本は、日本人が移住して生活できるような土地を熱心に捜す必要があった。だがアメリカとオーストラリアが日本の意図を妨害したので、日本は中国に目を向け、中国で何度も「衝突」をくり返した。そして、ついに一九三二年、上海で中国軍と衝突、宣戦布告なき戦争をした。

この沖縄戦で、日本は人間の命を引き換えにする、普通では考えられない大胆な武器を使用し始めた。アジア方面の大戦の最初に、日本は「神風部隊」と呼ばれる、あえて死を覚悟した飛行部隊を使い始めた。それは爆弾を積んだ飛行機が目標物に突っ込んで撃突し、飛行士の命を失うのも辞さない戦法だった。

日本は「爆弾飛行機」を使用した。それは人間一人を乗せて大きな飛行機から放して衝突させるのである。

(一九六五年版)



■アジアの教科書で見る日本の軍国主義■

のを何一つとして持っていないませんでした。ある時、日本兵は、美しい女の子を連れて来て、私の祖父に『買わないか』と言いました。カレン人には、人々を売買する習慣はありません。女の人はとても体が弱っていて死にそうだったので、看病したいと思ったのですが、恐ろしくて買うことができませんでした。そうしたら日本兵は、その女の子を川の中へ突き落とし、溺れ死なせてしまいました。」

戦時下の屈辱の経験が今もなお

タイは、戦争中、日本の友好国であったと言われる。しかし、それは日見のな中央政府だけのことであり、タイの人々は、日本軍が大きな顔をしてタイの国土を踏み荒らしたことによって、心がひどく傷つけられた。面と向って日本軍と戦っていないだけに心理的抑圧が屈折している。「自由タイ」に参加した知識人や抗日運動に参加した人々の中で、戦後の日本の経済的進出をよく思っ

## インドネシア人が歌う日本軍歌

「真白き富士の気高さを、心の強いかとして、御国につくすおみならば……」こんな歌詞ではじまる軍歌「愛国の花」を、はじめて耳にしたのはインドネシアのバンドンに暮

いる人は、誰一人としていない。戦時中の軍事侵略と二重写しになって見えるからである。チェンマイで玉本事件が公けになるきっかけは、北タイの新聞に、チェンマイ婦人会連合の声明書が掲載されたことにはじまる。声明書は、タイの大切な娘が、セックス・アニマルの相手としてしか見えないのか、日本人は一体我々の娘を何とと思っているのか、タイのすべての女には誇るべき文化があるという怒りの声であった。その背後には、かつて日本兵を相手にする娘を差し出さなければならなかった屈辱の経験がある。戦争中の体験をぬきにして、日本の経済侵略を考えることはできない。

(不破眞理)

（この原稿作成にあたって、チェンマイに長く在住していた望月賢一郎氏・穂積夏子氏の御協力を得ました。）

識をもちあわせていなかったわたしを、インドネシア人はいつも軍政下の日本人と重ねあわせて見ていたようだ。わたしが日本人だとわかったと、まるであいさつの言葉のように、「オイ、コラッ」「バックヤロ」が語られ、「ジャワ奉公会」「兵補」「労働者」「隣組」「ニッポン ジョウトウ」といった単語が飛び出してくる。

市場で野菜を売るおじさんは「キユジョウにむかってけいれい！」と突然どなって、大根をふりまわす。わが家の大家は、六〇をすぎた一人暮らしのおばあさんだったが、三〇年たつてとびこんで来た日本人に、複雑な感情をかくせないようだった。時々、台所の勝手口からヌーッと入

って来ては、「一、二、三」「アメ」「ハナ」など覚えていた単語をならべて、あとはスラング語（西ジャワの地方語）で一人ぶつぶつぶやいていく。一九五五年のバンドン会議を記念して名づけられた「アジア・アフリカ通り」は、その昔「東大和通り」と言われていたことをおばあさんは、大分あとになって教えてくれた。

わたしの仕事を手伝ってくれたアティのお父さんは「兵補」だった。毎日訓練があったこと以外には、多くのことを語ろうとしない父親の実直そうな顔からは、日本軍政への恨

インドネシア・中学校

その間我々国民は、我々の敵はイギリスとアメリカであり、また日本民族の先祖は神々であつて、「アマテラスオミカミ」の末裔である「テンノウヘイカ」は神々の長として崇拜しなければならぬことが教え込まれた。

概して三年ばかりの日本の占領は、国民に限りない困窮と、オランダ植民地政府以上の残虐で専制的な弾圧と、かつて我々が経験したことのないような苦痛と悲惨を招いた。「ケンペイ」日本の軍警察に対する恐怖は、ほとんどすべての抵抗を麻痺させていた。(一九五八年版)

小学校

日本はインドネシアに独立を与えなかった。その代わり、日本は欲するがままにインドネシア人民を支配した。

我々は「ロームシャ」にされた。あたかも奴隷のように……ジャングル、沼地、海岸などで働かされた。餓死、病死、虐待死。

日本は日増しに残虐になった。日本は各地で敗れたのだ。日本は我々を「利用」して、戦争に参加させ始めた。我々は戦争をしなければならぬ。誰のためにか。日本のためだ。(一九六二年版)

■アジアの教科書で見る日本の軍国主義■





「防空演習」をするインドネシアの女たち

いること、鉱山へ強制徴用されたこと、アンボン、フローレス島などの飛行場建設にかり出された多くの人が帰っていないことを知っている。コーヒーの麻袋や生ゴムでつくった服を着るほど衣料品が不足し、米の強制供出や大量の日本軍の上陸によって食べるものがなくなった苦しい生活を親から伝え聞き、教科書で習っている。日本を憎悪する親と暮しながら、食うために日本語を学ぶ学生、日本軍に危うく首をはねられそうになった体験をもちながら、生活のために日本人学生を下宿させている老人、その入りくんだ複雑な思いを、何も知らない日本人が荒々しくさかなでする。

背が低く、丸々と肥え太った丸坊主の日本人が、竹ざおのような長い刀を腰にさげて「バッキヤロウ」とどなる。インドネシア人は日本人をこのように戯画化する。この日本人像がさそい出す笑いには、食えなかった、着られなかった日本軍政下の思いが込められていることを、インドネシアに暮す日本人は知らない。

三〇年たった今でも、「日本軍による二万人の大虐殺」などの記事が報道される一方、直接戦闘がなかったジャワ島での日本軍政は、支配者の意図をこえたいま一つの役割をはたした。日本軍政を遂行するため、兵

力と若い労働力を必要とした日本は、封建的な主従関係や貧困のなかで呻吟している若い農民たちに兵士となるための訓練を行ない、青年団を組織し、指導者を養成している。日本軍政という外からの圧力によって、インドネシア社会が流動化したのである。オランダ植民者と結び、手を汚したことのない貴族が労働し、腰をかためて歩いた若者が堂々と胸を張って歩くようになった。豊かでない農民が、青年団の団長になる。婦人会の会長になる。兵士として毎日訓練をうける。戦争遂行に利用しようとの日本の意図をこえ、独立を求めるインドネシア人の銃口は、日本軍にもむけられていった。軍歌を聞いたのはこの人たちからだ。この人達と出会った日本人は、インドネシア人は親日的だと錯覚する。インドネシア人の沈黙している部分を知ろうとしない日本人のこうした錯覚は、何よりも私たち日本人の加害者としての歴史意識の欠如が生み出したものであろう。

(内海 愛子)

昔の日本軍政についてほとんど知識をもたない日本人が、ジャカルタを、バンドンを、バリを闊歩している。だが、インドネシア人は直接、日本の軍政を知らない若い世代も、数十万のインドネシア人が労働者として、泰緬鉄道建設に送り出されて

いること、鉱山へ強制徴用されたこと、アンボン、フローレス島などの飛行場建設にかり出された多くの人が帰っていないことを知っている。コーヒーの麻袋や生ゴムでつくった服を着るほど衣料品が不足し、米の強制供出や大量の日本軍の上陸によって食べるものがなくなった苦しい生活を親から伝え聞き、教科書で習っている。日本を憎悪する親と暮しながら、食うために日本語を学ぶ学生、日本軍に危うく首をはねられそうになった体験をもちながら、生活のために日本人学生を下宿させている老人、その入りくんだ複雑な思いを、何も知らない日本人が荒々しくさかなでする。

力と若い労働力を必要とした日本は、封建的な主従関係や貧困のなかで呻吟している若い農民たちに兵士となるための訓練を行ない、青年団を組織し、指導者を養成している。日本軍政という外からの圧力によって、インドネシア社会が流動化したのである。オランダ植民者と結び、手を汚したことのない貴族が労働し、腰をかためて歩いた若者が堂々と胸を張って歩くようになった。豊かでない農民が、青年団の団長になる。婦人会の会長になる。兵士として毎日訓練をうける。戦争遂行に利用しようとの日本の意図をこえ、独立を求めるインドネシア人の銃口は、日本軍にもむけられていった。軍歌を聞いたのはこの人たちからだ。この人達と出会った日本人は、インドネシア人は親日的だと錯覚する。インドネシア人の沈黙している部分を知ろうとしない日本人のこうした錯覚は、何よりも私たち日本人の加害者としての歴史意識の欠如が生み出したものであろう。

(泉 玲子)

## 戦争へ総動員された女たち ……アジアへの加害者

### 二つの大戦を体験して

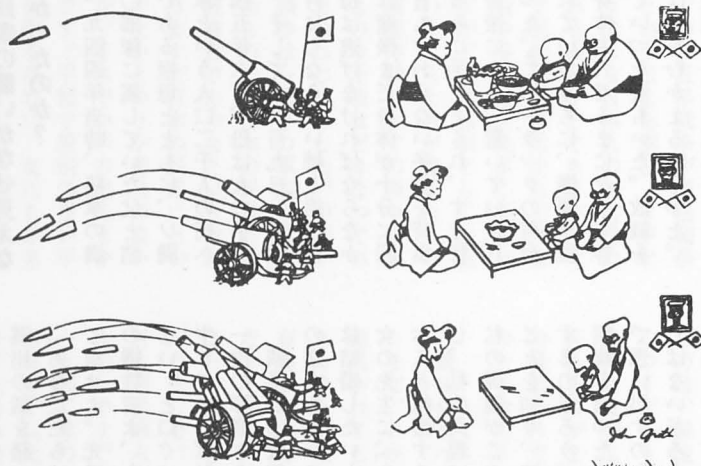
敗戦の時、天皇の放送を聞いて夫とともに思わず「万才」と叫びました。やれやれ敗けてよかったと。戦争中の生活の変化、それは生活全体です。自分の意思で行動することはできません。すべて上からの命令で動かねばなりません。その中でまず子供たちの食糧をどうするか、一番の問題でした。私どもは安芸鉱山という一つの集団の中で準軍属として働き、愛国婦人会、隣組などに参加する暇はありませんでした。私は日露戦争の直後に生まれ、第一次大戦、第二次大戦と二回も大きな戦争の中を生きてきました。子孫を守るため、民族を守るため、支配者の起こす戦争には絶対反対します。

### しわよせは庶民に

その時、私の居住地（名古屋市中村区）ではチフスがまん延し、隣近所の幼な友達のほとんどが死亡。さらに

弾丸が増えると——ゴハンが減る！

MORE BULLETS—LESS GOHAN! (food)



(ニューヨーク・ネイション誌から)

東南海大地震（M8.0）と三河地震（M6.9）に見舞われ、わが家の倒壊はまぬがれたものの、長く続いた余震と空襲のダブルパンチは、恐怖以外の何ものでもありませんでした。毎日のように町内の広場に集められる焼い弾の山を見ては、きょうも助かったと思ったものです。いのちがあつたのが不思議なぐらい。戦争は終わったものの、私の家族にとって本当の戦争が、戦後二十年近くも続いたといってもよいと思います。住む家もなく、家財もなくおカネもなし。とにかく他人の家に間借りして、一日一回の食事もありません。苦しい生活の連続でした。長ずるにしたがって、戦争は政治のかけひきや力学に

私たちの会のメンバー、あるいはその母たちが体験してきた戦争とはどんなものであったのか。その中でどんな生活があったのか。今回の特集にあたって、体験談を寄せてもらった。その声から、それぞれが、好むと好まざるとにかかわ

らず、様々な形、様々な程度で戦争を担っていることがわかった。年齢も体験も異なる女たちが、戦争をどううけとめ、それをどのような思いで今にひきついでいるかを四人の文章からみてみよう。

よってひきおこされること、そして結局、私たち庶民が一番苦しいつらい目にあわされることを知りました。それ以上に憤りを感じたのは、特権階級の人々が戦争責任をとるところか、その上にあぐらをかいて優雅な暮らしをし、今なお私たちからしぼりとって、私たちが苦しめていることです。そればかりか彼らは、戦争こそ、経済にとっても文学にとっても活力の源だと公言してはばからない。この戦争礼賛を私たちは、どうあつても許すことはできない。

(敗戦時 三才)

### 興亜の母体と激励されて

一九四一年大東亜戦争（当時こう呼んだ）の時、私は女学生だった。小学生的頃から中国との戦争は続いていたが十二月八日の真珠湾攻撃の発表を聞いたとたん「負ける」と一瞬戦慄を憶えた。「えらいことになった」と世界の大勢もよく知らされてない時代の十代の女学生でもドキンとしたのである。



## 第7回 女大学

1978年9月20日

# 戦争に荷担した女たち

——大日本国防婦人会を中心に——

加納実紀代



銃後というのは、女たちが侵略戦争の後方部隊、侵略戦争を支える基盤となったことだと思えます。私たちが銃後史を研究しているのは女たちがなぜ、どのようにして銃後体制に組み込まれていったのかを明らかにしていきたいからです。私は戦時中は幼児だったので銃後の対象ではないし、直接的に戦争体験もありません。そういう私が戦後、成長の過程で、かつての一五年戦争が侵略戦争であったということを学び、アジア諸国の人々による日本人の加害性の告発に触れる機会ができました。その一方で昭和三十年代から、女たちによる戦争体験記が数多く出はじめたのですが、被害体験としての戦争体験というところが貫かれていました。被害体験としての戦争体験と加害性という矛盾はどうなっているのかと思いはじめました。中国では、あの戦争は一握りの軍国主義者が起こしたもので、日本の民衆も中国も共に被害者であったという言われ方があります。日本の民衆にとつてはありがたいというか都合の良いことですが、それでいいのだろうかと思うのです。平和で差別のない平等な社会を作るために、女たちが主体的な力になり得るためには、一人

一人の女が人間として自立することが必要なのだと思います。そういう主体的な人間の最低条件として、自らの責任に対して無自覚であつてはならないと思えます。女たちが被害体験に固執するのは、無理もない面もあります。女たちは直接銃を取って戦ったわけでもなく、中国や朝鮮の女たちを強姦したりもしなかった。食糧難や、戦火に苦しめられて、戦争責任に関心が向かなかったのです。しかし一五年戦争が戦われ得たのは、銃後の女が後部を支えたからです。そういう自らの果たした客観的な役割に対して、きちんと責任をとるのがまず主体的な人間としての最低条件で、女にも戦争責任はあつたと考えています。

### 銃後体制へ向けての組織化

なぜ、いかに女たちが銃後体制に動員されてしまったのかというと、あらゆる文化の領域で一番具体的で有効であつたのは、女たちの組織化だつたと思います。一五年戦争下には三つの大きな体制的な婦人団体がありました。「愛国婦人会」、「大日本連合婦人会」、「大日本国防婦人会」です。パールハーバー直後の一九四二年の二月にこの三つが統合されて、「大日本婦人会」になります。大日本連合婦人会の発会は一九

### 愛国婦人会

愛国婦人会は、一九〇一（明治三十四）年発会、半世紀の伝統をもつています。奥村五百子という、明治

## 嫁ぐ誇りは工場育ち

航空機に觸れるだけで満足



女子挺身隊  
報告書③

満州事変、支那事変と小学校へ上がる頃からズーッと戦争の中で育った私たちの年代は、日清、日露、第一次世界大戦と勝つ戦争ばかり身近で聞かされていたので、何となく勝つものかと思ひこんでいた。アメリカとの開戦はシンガポール陥落など勝利に沸いていた頃だが、負けると思つた。でも口には出せなかった。それは禁句だったし、そう思わない人が殆んどだったから。モッコで土を運ぶ勤労奉仕も足並揃えての横列行進の訓練も私にとっては虚しかった。体操の時間「皆さんは興亜の母体だから、腹筋を強くしなさい、もっと我慢して頑張れ」と号令された。虚しかった。結婚する対象者に餓死され、独身できて、今これを書きながら、更に虚しい。

アジア民衆の闘いがなぜ見えなかったのか？  
母は、一九四四年当時、陸軍の満州第三九〇部隊に属していた父と結婚し、姑である祖母とともに、ソ満国境の東寧という人口二千人の街へ渡つた。四五年六月、母は女の子を出産した。そして、八月九日ソ開戦。生後二カ月にもならない姉と祖母をつれて、母は逃げなければならなかった。母は産後まだ身体が十分に回復せず、首もすわらない子供を背負い、ぬかるみに足をとられ、すぐ行進の一番最後になり、置いていかれそうになった。また、トラックの荷台に乗せられていくうちに、爆弾が投下され、身体中火だるまになって谷底に落ちていった女もいた。敗戦を知つたのは秋をむかえる頃だった。

「大阪朝日新聞」(1944年2月8日付)より  
厳寒の冬、母は新京(現在の長春)の街角に立つて机のひき出しにいくばくかの菓子とを並べて売り、半分崩壊した無人のビルの柱や板をはぎとつて、暖をとるタキギにした。栄養失調にかかり、小さい子から先に死んでいった。姉もとうとう栄養失調にかかり、生後10カ月で死んだ。母と祖母は、一九四六年夏、日本に帰国

した。母は、私たち四人の子たちに満州の話を語って聞かせるたびに、「あなたたちは、平和な時代に生れて幸せよ。光子はうちの小さな戦争の犠牲者よ、もう戦争はしてはいけない」と口ぐせのように言っていた。生きていれば私より二十年以上の姉は、一枚の写真さえ残っていない。  
戦後二〇数年がたち、私は韓国人の恋人をもつことになった。私たちは結婚したいと思っていた。彼は、女の先生に「あなたのような人が日本人と結婚するなんて」と泣かれたし、私の両親は絶対反対であつた。私の両親がこの結婚に反対していることを知り、彼は「一体、なぜ反対するのだろう。君の両親は戦争の時朝鮮を通つたはずだ。その時、そこで思い出すのもいやな経験をしたのではないだろうか」と言つた。この言葉をきいて、私は稲妻が落ちたような衝撃を受けた。一体、この人の眼には私の両親はどう見えるのだろうか？ この人だけでなく、この人の背後にいる多くの朝鮮の人々、中国の人々にとつて、私の家族はどう見えたのであろう。日本の軍人とその家族。私はそのとき、目からウロコが落ちるように、私の両親もまた逃れられない戦争の加害者であることを知った。祖母は、東北地方の農村出身で純朴な働き者であつたが、満

州では耕せば耕すだけ自分の畑になるんだ」と孫の私たちに語つた。彼女の頭の中には、その土地が以前誰かのものではあつたという考えは、みじんもなかった。それは確かに中国人の土地であつた。耕すだけ自分のものになるという、日本の農民には夢のような話に有頂天になり、アジア人の土地を奪いつつていくという意識が全く欠落していたことを、今になってつくづく考えざるをえない。

(現在31才)



維新の時には男装して勤皇運動に参加したという、非常に活発な女性が一九〇〇年に中国にいました。

当時義和団の乱という反帝国主義的な民衆闘争がおこり、中国を半植民地状態においていた帝国主義諸国が、あわてて鎮圧の兵を出すわけでした。

当然日本も鎮圧の兵を出しました。たまたま奥村五百子は日本軍が戦った後を経過したわけですが、日本軍の兵士が道なき道をあけ、泥水をすすって、異国に屍をさらすという状況を見て、お国のために命を捧げてくれる人達がこういう状況で放っておかれたのではないんだというので、婦人報国の一環として軍隊慰問だとか、遺家族のために何がしかの補助金を出すとかいう、軍人援護のための団体を作ったわけですね。一九〇一年という日露戦争の直前で、体制としてもこれはありがたい会だと非常に肩入れし、補助を与え、大団体になつていく力をつけたわけですね。

大正年間になりますと、戦争がなかったため、軍人援護団体から社会事業団体に性格を変え、女のための助産所とか、母子寮、託児所の経営という社会事業にも手を出すようになります。明治の間に台湾や朝鮮にも支部ができ、昭和になつてからは、満州、それからサイパンにもできて、愛国婦人会経営の家政学校で日本婦

女を教えたというのです。サイパンは太平洋戦争末期、一九四四年の七月に米軍に攻められて陥落します。サイパン玉砕は、女たちも子どもののどを掻き切つて断崖から身を落とさせ、「生きて虜囚の辱しめを受けるな」というのが女たちにまで浸透していたというので当時は非常に評価されました。そういう風に女たちが追込まれたのは、愛国婦人会支部が果たした役割があるのではないかと私は思います。

徳を教えたというのです。サイパンは太平洋戦争末期、一九四四年の七月に米軍に攻められて陥落します。サイパン玉砕は、女たちも子どもののどを掻き切つて断崖から身を落とさせ、「生きて虜囚の辱しめを受けるな」というのが女たちにまで浸透していたというので当時は非常に評価されました。そういう風に女たちが追込まれたのは、愛国婦人会支部が果たした役割があるのではないかと私は思います。

#### 大日本連合婦人会

大日本連合婦人会は、明治以来各地に出来ていた既成の婦人の集まりを全国的な形で組織しようという事で、これも日本婦道奨励、家庭教育振興、家庭生活刷新という三項目を掲げて文部省の管轄下で組織化にのりだしてくるのです。

#### 大日本国防婦人会

次に大日本国防婦人会ですが、私は大日本国防婦人会を中心に話したいと思っています。というのは、銃後体制との関連を考えると、最も力があつたし、最も銃後の要であつたからです。そのやり方が大日本連合婦人会とか愛国婦人会に影響を与えて大日本婦人会とのあり方をも規定したし、同時に隣組制度というのが一

九四〇年からでき、食糧配給などで、経済的、具体的な役割を担うと同時に、相互監視の組織としても働いたわけですね。この隣組制度もあるいは、大日本国防婦人会の組織形態を見習つたのではないかと思います。大日本国防婦人会は、一九三二年に発会しました。一九三二年という年は、前年の九月に満州事変が勃発しています。一九三二年の一月に上海に飛火して二月に例の爆弾三勇士事件がありました。突撃するにあたって爆弾を抱えて飛び込んで爆死したという、それだけの事件です。それが自らの死をも恐れず飛び込んだという美談になつて日本全国に流布され、それによつてかなり日本民衆の意識というものが戦争に向けて収斂されていきます。そうして上海事変に日本から出兵して行く人達がいろいろな港から出るのですが、軍港として使われていた大阪の天保山棧橋から、兵士達の送迎をしていたのが近くに住む安田せいさんという主婦です。彼女は、兵士達が疲れた様子で寂しそうだし、ボタンはちぎれているし、服はほつれている。これでは命をかけて戦つてきた兵士達があまりに不自由なのではないかと思ひ、自分が参加していた地域の婦人会の人たちを誘つて兵士に熱いお茶を御馳走したり、ボタンをつけてあげたりのサ

ービスを始めました。それを警察、憲兵が知りましてこれは良いというので、陸軍の方に話がいつて、陸軍にとつてもありがたい組織なわけですね、大いに肩入れをします。それだけでなく、大阪の金属商とか機械工場主達が女性会を作つて協力したということもあるらしい。機械工場というのは軍需工場にもなり得るわけですね、そういう目論見もあつたのかなと思ふのですが、一九三二年三月、まず大阪国防婦人会が成立するわけですね。それが東京の方にも波及し、同年の十月東京国防婦人会というのが成立し、十二月には全国組織として発足するといふわけですね。零から出発して十年足らずの間に九一〇万になつたのは、他に例のないぐらゐ急速な伸び方です。その理由は後で一緒に考えていきたいと思います。

#### 大日本国防婦人会の目的

この会の目的は一言でいえば家庭国防というのです。この目的については『宣言六箇条』というものがあつて、世界に類なき日本婦徳を元とし、ますますこれを顕揚し、悪風と不良思想に染まず、国防の堅き礎となり強き銃後の力となりましよう。これは女というものは、あくまで家庭にあつて、自己犠牲的に夫や子どものために尽くす、それが世界に類

なき日本婦徳であるという考え方です。それをますます明らかにした上で、赤化思想、左翼思想ですね、そういうものに染まらないで国防の堅き礎となりましよう。これが一番の目的だつたと思います、それからあとは、心身共に健全に子女を養育して皇国の御用にたてましよう、健やかな子どもを育てて役に立つ兵士にしましようということですね。それから、台所を整え、いかなる非常時に際しても家庭より弱音をあげないようになしましよう。消費節約、軍費協力ということですね。あとは軍人援護関係ですけど、国防の第一線に立つ方々を慰め、その後顧の憂いを除きましよう。母や姉妹同様の心をもつて軍人及び傷病軍人並びにその遺族・家族のお世話をいたしましよう。一旦緩急の場合、あわてず迷わぬよう常に用意をいたしましよう。こういうものを、声をそろえて歌いあげていたわけですね。ここでもわかりますように、一番の目的は、体制に対する怨嗟の声を抑えるためのクツシヨンに女たちを使つたのではないかと思うのです。『国防婦人会十年史』なるものに、こういう図があるのです。真中に遺家族とか傷病軍人、出征家族、その周りを国防婦人会が取り巻いて、その周りを在郷軍人会が取り巻いて、それらを警察と憲兵が

睨んでいるという図です。これが国防婦人会の役割を明らかにしているものだと思うのです。遺家族、出征家族というのは戦時体制に対してどうしても不満をもつたり不平を感じたりするものですから、それがひいては戦争反対とか厭戦思想とか、革命思想にもつながる、そういうことが起こつてはたいへんなので警察と憲兵が睨んでいるわけですね。それが直接睨んではやっぱりあたりが強すぎるというので国防婦人会の母心というか、ふんわりとしたもので周りを包んでしまつて不満を抑えているということだと思ひます。そういう役割をさせられていたわけですね。会の伸びは非常に勢いがよく、入会資格は、日本臣民たる婦人にして、会の主旨に賛同するもので、年齢などの規定はないわけですね。この場合、日本臣民の中には、朝鮮人、台湾の人達、樺太も入つています。とにかく十年足らずの間に一〇〇〇万近くになつた。なぜこれほど勢いよく広まつたのかということなのですが、一つは先程言いましたように陸軍の肩入れ、上からの強制加入ということですね。この時期、なぜ陸軍がこれほど肩入れをしたのかということには、近代戦争を想定した場合、近代戦争は総力戦であるという認識が陸軍の中には早くからありまして、陸

軍が一九三四年に「国防の本義と其強化の提唱」という、通称「陸軍パンプ」といわれているものを出します。女の力をどういう形で軍事体制に収斂するかというのを考えていたわけですが、愛国婦人会は内務省、連合婦人会は文部省ということで、陸軍の思うように動かせる手兵というのがなかった。その時、たまたま安田せいさんなる女性が出てきてくれたものですから、陸軍は肩入れしたのだと思ひます。そういう形で上から加入を強制していくということが確かにあつたのですが、やっぱりそれだけじゃない、大衆的な下からの盛り上がりが非常にあつたのではないかと私は思つてゐるわけですね。

#### 割烹着の果たしたものの

それはなぜなのかということですが、一つは制服の問題があると思ひます。国防婦人会は、割烹着という非常に庶民的な制服で登場した。これはもう男が考えたものであつて、女はあくまで台所にいるものであるという認識に基づいての発想なのですが、女の戦場である台所の延長としての軍人援護だという形を強調したわけですね。それと同時に、割烹着という誰れにでも手にはいるような安価なものということで一応の平等観みたいなものを満足できるわけ

です。男達の認識としては日常性の延長としての制服だという言い方をしているのですが、それだけではないのじゃないかと私は思ひます。確かに都会のサラリーマンの女たちにとつては割烹着というのは日常性の象徴であつたかもしれないが、農村の女たちにとつては割烹着すらもかなり晴れがましいものではなかつたかと思ふのです。それは、みんなが割烹着を着て恥ずかしそうに、にこにこしながら集まつてきたというのが記録の中にみえるのですけど、農村の女にとつては、農婦であり、かつ家のこともやるというのであつて、割烹着を着て家のことだけしていられるというのは、一つの憧れであつたのではないかと思います。日常性の延長としての形として都会の女たちを引きずりだすと同時に、ある晴れがましさをもつて農村の女たちを引きだすためにもその割烹着というものは役立ったんじゃないかと思ふわけですね。

#### 国防婦人会と底辺の力

それから、大衆的に上からだけじゃなくて女の前線としても広がつた原因の一つとしては、組織がかなり下までおりにあるということです。会費が安く、だいたい年額十銭から二十銭、それも現金収入のない農村





あちこちで活躍した大日本国防婦人会

などでは、夜なべに藁草履を作るとか、廃品回収をやるとかいう形で加わることができる形をとっています。直接労働力奉仕というのを中心にしてくるわけ、お金のない人も生き生きと参加できるということがあったのだと思います。これも特徴ですが、底辺の力をうまく引きだしていると思います。また、この国防婦人会には、女子労働者の参加が非常に多い。当時の女子労働者というと、紡績工場とかデパート、官営工場、煙草工場や交通関係、そういう、女たちが集団となっている所は分会がかなり数多くできている。一九三三年末、発足して一年ぐらいで工場に二五九分会が成立しています。それから被差別部落にもはいっています。福岡県は部落解放闘争の盛んな所で、松本治一郎氏の出身地です。ここで部落の

人達が国防婦人会に加入し、建前としての平等はあるのですが、やっぱり会員どうしの摩擦が起こっています。それから朝鮮人の加入があります。全国に、最終的にどのくらい朝鮮人の分会ができたかわからないのですが、かなりの勢いでできているというふうに思われます。写真など見ますと、朝鮮人が白い朝鮮服の上にやっぱり割烹着を着て、たすきをかけて団体行動をしている写真が残っています。今見ると非常に無惨な感じですが、それから娼婦の分会があり、芸者さんとか女給とかいう、愛国婦人会からは、とても考えられないような底辺の人達の組織化が国防婦人会では進んでいます。これらは日本国内のことですが、朝鮮には本部があり、満州にも本部があります。また、台湾においても国防婦人会が非常に活躍しております。具体的にどんなことをしたかということですが、一番多いのは出征兵士たちの送迎、それから廃品回収などをして軍事費を助ける、一番多いのは慰問で、軍隊とか病院に行つて繕いものをするとか洗濯をする。それから神社の清掃、もう少し戦争が激しくなると、直接工場へ週二回とか班ごとに決めて行つたということもあるらしい。大日本婦人会になつてからは、家庭工場といわれまして、班

ごとに班長さんの家に集まって部品組み立てもやつていた。農村においては、共同耕作、出征兵士とか遺家族なんかで男手を失った家の農作業を皆で手伝うとか、農繁期における共同炊事とか、共同保育などもやつたようです。

#### 国防婦人会と女性解放

陸軍省が自画自賛して、いかに国防婦人会が有効であつたかということとを二〇項目ぐらい言っています。その中には、日本精神が国防婦人会のおかげで大いに奮い立ったということ、国防思想が非常に大衆化したということ、社会の階級対立観念の融和も言っています。私はその階級対立があるにもかかわらず抑えてしまったということだと、陸軍省の評価とは全く逆転します。それから犠牲奉公、我が身を犠牲にして奉公する精神が旺盛になった。母の重責の再考を女たちに促した。その中でかなり最初にあげられているのは、婦人の地位向上、自覚喚起に力があつたといっている。でもこれは非常に問題であると思う。国防婦人会によつて婦人の地位は向上したかということなのですが、市川房枝さんなどは、国防婦人会に集うことも女性解放の一種であるというふうな言い方をしています。これはどういう事か

というと、これまで家の中に閉じこめられていた女たちが、家から離れて集团的に、社会的な行動をするということとは、女性解放ではないかという事です。それは確かにあつたし、社会的な発言の場というのが大衆の女に、はじめてここで開かれたということもあると思う。政策決定の場に女が参加するということもこれを機会にできた。これは国防婦人会だけのことでなく、戦時体制そのものの問題だと思ふ。戦時体制になつて、男がいなくなつて、初めて女の力が必要になり、女が政策決定の場に進出し得た。それから、共同炊事とか共同保育によつて家庭を社会に向けて開くということが少しはプラスになったのではないかとはいえられます。しかし、これで女性解放といつていいのか。女の解放という場合は、個としての自立ということが前提としてあり、その上での共同だと思ふわけです。国防婦人会によつて個別家庭からの解放というものはあつたかもしれない。けれど、それが直ちに国家、それも侵略戦争を行なう国家にながきえられ、というふうな形で、家からの解放をかちえたというのは、真の女性解放ではないと思います。

(記録 高橋裕見子)

## 中国から祖国日本へ

### 反戦を訴え続けた女

#### 長谷川テルのこと

「ほんとうの愛国主義とは、人類の進化とけつして対立するものではありません。でなければそれは愛国主義ではなく排外主義なのです。」これは私にとって、啓示にも似た長谷川テルの言葉である。抗日運動の中に身を置き、祖国からは売国奴、一般の中国人からも同志として決して容易に受け入れられなかったであろう長谷川テル。中国のエスペランティストにはベルダ・マリーヨ(緑の五月)と愛称されたこの女性は一九二二年三月、山梨県に生まれた。姉、テル、弟の三人の子と両親という家庭は、

とすんだテルは、言いだしたら後にひかない性格と文学的才能で人を驚かせはしたが、表面上はロマンチックな少女だったといわれている。女高師時代は、やや退屈な国文教師になるための勉学のなかで、何かしたいというやみがたい内的エネルギーがうずまいてはいたが、結局は平和で静かな時の流れに漂った日々であつた。当時の彼女の手紙は、はじけるような少女の愛らしさに満ちている。思想の変化は、大学卒業をひかえ、これから社会に出ようとする人間がいやおうなく現実と直面し思考してゆく、そんな過程で起こつた。

ペラントの思想、社会への意識を鋭くしていったようである。男性権威への反駁、女性差別への憤りという下地に加え、ファシズムが彼女に与えた仕打ちと、青春時代に内向していたエネルギーは、彼女を語学的にも思想的にもすぐれたエスペランティストとする動力となつた。彼女がエスペラントを学びはじめた時期、プロレタリアエスペラント運動はあいつぐ弾圧のもとで壊滅状態に瀕していた。当時日本の進歩的エスペランティストによつてなされたプロレタリア・エスペラント運動は、マルクス主義文化運動の一翼を担つた。その趣旨は労働者の国際連帯と国際文化の享受のためにエスペラントを役立てることにあつた。彼らは労働者へのエスペラント普及と国際連帯のための活動を行ない、抗日中国勢力へも理解を示した。抗日意識に燃える若い中国留学生達は、この運動に賛意を示し、彼らと交流するとともに東京でエスペラントグループをつくつていた。彼女の夫となる劉仁は、「満州国」出身のこんな青年の一人だつた。日中エスペランティストの交

流の場で二人は出会い、愛し合い、一九三六年秋、秘密に結婚する。健康診断書の交換と記念写真をとつただけの簡素な誓いであつた。

一九三七年四月、日中戦争が勃発する直前に、テルは夫を追つて上海に到着。上海は支配する者の豪華と虚飾、難民、貧困、暴力そして抗日救国の抵抗がうずまく中国一の大都市であつた。若い中国エスペランティスト達も、ここ上海を中心に、抗日救国運動に参加していた。青年達は、抗日を外国に国際宣伝するために、エスペラントで機関誌を出版するなど、精力的に活動していた。テル自身も流暢なエスペラントを駆使し、日本ファシズムに対する戦いのためにともに働いた。中国のエスペランティストにとつて、彼らのなかに飛びこんできた小柄なこの日本女性は、年を追つて細くなつていく日中エスペランティストをつなぐ最後の糸であり、大きな励みであつたようだ。

彼らは世界のエスペランティストに向かつて特に日本のエスペランティストに向かつて中国の姿と反戦を訴えつづけた。しかし残念なことに、彼らの声は日本までとどくことはほとんどなかったようだ。日中戦争の開始は、わずかな良心の輝きをも絶やすことになる。中国から通信がくることは、それだけで牢獄につながれる理由と

「ほんとうの愛国主義とは、人類の進化とけつして対立するものではありません。でなければそれは愛国主義ではなく排外主義なのです。」これは私にとって、啓示にも似た長谷川テルの言葉である。抗日運動の中に身を置き、祖国からは売国奴、一般の中国人からも同志として決して容易に受け入れられなかったであろう長谷川テル。中国のエスペランティストにはベルダ・マリーヨ(緑の五月)と愛称されたこの女性は一九二二年三月、山梨県に生まれた。姉、テル、弟の三人の子と両親という家庭は、圧倒的に男性優位の世界だつた。実直で苦勞人の父は、学歴がないために出世できないというコンプレックスがあり、一人息子へ夢をたくし溺愛した。自分が女であることをうけいれ、男たちに従わなければならぬ、そんな家庭の雰囲気は、勝気で感受性、正義感が強いテルには我慢できないものであつたようだ。家庭内の保守的な男たちと対立し、憎み、反抗する。これが彼女の人生の原点である。

東京に帰つてきたテルは、日本エスペラント学会でボランティアとして働きエスペラントの語学力を深める一方で、進歩的エスペランティストと交際し、彼らの刺激のもとでエス

ペラントの思想、社会への意識を鋭くしていったようである。男性権威への反駁、女性差別への憤りという下地に加え、ファシズムが彼女に与えた仕打ちと、青春時代に内向していたエネルギーは、彼女を語学的にも思想的にもすぐれたエスペランティストとする動力となつた。彼女がエスペラントを学びはじめた時期、プロレタリアエスペラント運動はあいつぐ弾圧のもとで壊滅状態に瀕していた。当時日本の進歩的エスペランティストによつてなされたプロレタリア・エスペラント運動は、マルクス主義文化運動の一翼を担つた。その趣旨は労働者の国際連帯と国際文化の享受のためにエスペラントを役立てることにあつた。彼らは労働者へのエスペラント普及と国際連帯のための活動を行ない、抗日中国勢力へも理解を示した。抗日意識に燃える若い中国留学生達は、この運動に賛意を示し、彼らと交流するとともに東京でエスペラントグループをつくつていた。彼女の夫となる劉仁は、「満州国」出身のこんな青年の一人だつた。日中エスペランティストの交

流の場で二人は出会い、愛し合い、一九三六年秋、秘密に結婚する。健康診断書の交換と記念写真をとつただけの簡素な誓いであつた。

一九三七年四月、日中戦争が勃発する直前に、テルは夫を追つて上海に到着。上海は支配する者の豪華と虚飾、難民、貧困、暴力そして抗日救国の抵抗がうずまく中国一の大都市であつた。若い中国エスペランティスト達も、ここ上海を中心に、抗日救国運動に参加していた。青年達は、抗日を外国に国際宣伝するために、エスペラントで機関誌を出版するなど、精力的に活動していた。テル自身も流暢なエスペラントを駆使し、日本ファシズムに対する戦いのためにともに働いた。中国のエスペランティストにとつて、彼らのなかに飛びこんできた小柄なこの日本女性は、年を追つて細くなつていく日中エスペランティストをつなぐ最後の糸であり、大きな励みであつたようだ。

彼らは世界のエスペランティストに向かつて特に日本のエスペランティストに向かつて中国の姿と反戦を訴えつづけた。しかし残念なことに、彼らの声は日本までとどくことはほとんどなかったようだ。日中戦争の開始は、わずかな良心の輝きをも絶やすことになる。中国から通信がくることは、それだけで牢獄につながれる理由と



り離婚されなければならなかったのだ。エスペランチストとして反ファシズム戦線で働きたいという志に反し、エスペラント界以外の中国では猜疑と敵愾心にテルは出会った。焦燥、不安、貧困。それ故、漢口で一九三八年十月末までの三カ月間、正式に抗日陣営で反戦放送を日本語でするという役割を担ったときの喜びはひとしおのものであったと想像される。生き生きとマイクの前に立ち働く。第二次国共合作の創始期、彼女の中国時代もつとも活力と希望に満ちた時だった。しかしその行為は漢口陥落とともに日本軍の知るところとなり、「祖国に弓を引く嬌声売国奴」と罵倒されることとなる。日本軍の侵略に追われながら、二人は新しい根拠地重慶に向い、ここで再び国際宣伝の仕事についた。しかし



テルと劉仁

ながら一九四五年末までの七年間、彼女の十年間の中国生活で一番長くどまつたこの重慶も、決して安住の地ではなかった。「この霧の町は依然として霧につつまれている。霧の下にわたしたちは戦う中国にあつてはならないものをたくさん目撃する」。示唆にみちたこんな一行をテルは書き残している。病弱の夫、出産そして自分も結核におかされているという肉体的苦痛に加え、共産党に同情をよせた二人が、国共合作の時代とはいえ、国民党の下で働かなければならなかったことは、精神的にもつらかったことにちがいない。

抗日戦争勝利後いとまなく国内戦争は激化していった。テルと劉仁は国民党の妨害にあいながらも解放区へと働き場所をもとめ東北にさすらい、最後に北辺チャムスにたどりついた。そしてこれから働こうとしていた矢先、二人の幼ない子を残して、あいついで病死した。それは、一九四七年の春まだ浅い頃だったという。テルの思想は、体系的に表わされたものではない。マルクス主義、中国共産党に同情をもっていただろうが、それも国共合作のもとでは、公にできなかったであろう。そんな限界を前提にしながら、少なくとも彼女が終始一貫して一人の平凡な日本女性エスペランティストという立場を

固守していたことは断言できる。日本のエスペランティスト、中国との連帯は彼女一人が言ったわけではないでもなぜあの時代にあつて、テルだけが地理的にも思想的にも国境を越えていくことができたのだろうか。女であること。それはテルに、抑圧するものへの憤りと差別されるものへの深い同情をひきおこした。女であること。それはテルに、夫劉仁、夫の国中国そして日本兵士をもふくむ人類への愛をみちびいた。また彼女はエスペランチストでもあつた。社会への洞察力を先鋭にしていた媒介はエスペラントという言語とその思想であつた。平凡な日本女性という立場の表明は、エスペラントの創始者ザメンホフの人類主義に彼女が深く共鳴していたことをしめしている。晩年のザメンホフは、理想の実現のためにはエスペラントという言語のみではなく、言語をささえる思想が必要であることに気づいた民族のアイデンティティを守りながら、なお民族をこえて平凡な一人の人間同士が家族のように愛しあうこと―人類主義とそれはよばれている。エスペランチスト・テルは、中国に渡り、日本ファシズムが無差別に爆弾を投下し、罪のない人々を殺戮しているのを目撃し、その人類主義をなお一歩すすめたのである。

中国の解放は全アジアの被抑圧民族が勝利する鍵であり、裏切者とよばれても中国のためにともに戦うことこそ、結局、ファシズム日本から日本は無告の民が解放されることであると信じた。「わたしたちもまた、おのれの祖国を熱愛している。しかしその祖国愛たるや、他民族への愛と尊敬と両立しないような性質のものではない」と考えた。冒頭のテルの言葉の底にはこのような思想と行動が横たわっていた。

抑圧されると人は、抑圧する対象をさがそうとする。差別の構造は複雑だ。ごく少数の人のみが、複雑にからみあつた迷路から真理への道を見いだすことができる。

新生中国創出という仕事に従事するために、妊娠中絶の手術を受け、その失敗で三五歳の生涯をとじたテル。私は彼女の生の重さを、中国で会つた何人もの中国エスペランチストのまぶたに光るもののなかに見たテルの生はまた、差別されている側にこそ普遍へ飛翔する可能性がより多くあるという希望と矜持を私たちが女に与えてくれる。願わくば、今、日中友好のシンボルとされているベルダ・マーヨが、再び売国奴と呼ばれる日のなからんことを……。



## 女子自衛官の射撃訓練

今、軍事化を阻止するために

敗戦から33年が過ぎた。平和憲法のもと日本は繁栄してきたという。だが、惑わされてはならない。24万の自衛隊員、6兆円の軍事費を支出し、思想、信条の自由をおびやかす周到な歩みの進行を私たちは今阻止しなければならない。

# 軍事費拒否の闘い

七一年に学校を卒業し就職した私は、毎年暮に年末調整が済んだ後で職場から手渡される源泉徴収票の裏に円グラフが書かれているのに気づいていた。例えば七四年の一月から十二月に給与から源泉徴収された国税額その他を記録してある七四年度分の源泉徴収票の裏は図表のとおりであった。この円グラフ中、「国を守るため」と書かれているのが、いわば軍事税であり、七四年度の場合税金支払額の六・四％に相当することを示している。

この円グラフの示す事実から、自分の支払う税金が他ならぬ戦争準備のために使われているという不本意な認識を得、軍事費相当分の税支払い拒否という行動を起こした人がいる。それは七四年春の確定申告期になされたのだが、同年秋に多くの力強い参加者を得て結成された良心的軍事費拒否の会の呼びかけ人となつた日野市のオーノミチオさんである。私は会発足の報道を新聞で見て知つた時、大きな共感を覚えたものである。六七年から七一年という、ベ

トナム反戦・反安保闘争の高揚期に  
大学に籍を置いていながら何ら主体  
的な反戦行動をとり得なかった私と  
しては、何もできなかったことに負  
い目を感じていたと同時に、運動全  
体の衰退（挫折と呼んでもよいかと思  
う）に苦しいものを感じていた。

軍事費拒否という形で反戦意思  
表示は、それまで聞いたことのない  
発想であり、その頃の私には何故か  
ピツタリくるものに感じられ、関わ  
ってゆくようになったのである。

オーノさんを初めとして、良心的  
軍事費拒否の会発足時から関わって  
いた人たちは、キリスト教徒として  
反戦平和の信念に燃えた人、弁護士、  
税法学者など、軍事費を拒否する運  
動を進めてゆく上で大きな力を持つ  
人々であった。

会を中心に全国で軍事費拒否行動を行なう人は毎年着実に増え続け、今年の春の確定申告期には約八十名の人がこれを行なったことを会で把握している。

自家営業などで申告制による払税をする人たちは、軍事費相当額を支払わない、給与所得者は前もって源泉徴収された税額の軍事費相当額を還付請求する、これを毎年二月十六日から三月十五日の確定申告期に各人の住所に在る税務署に申告して行なうのである。

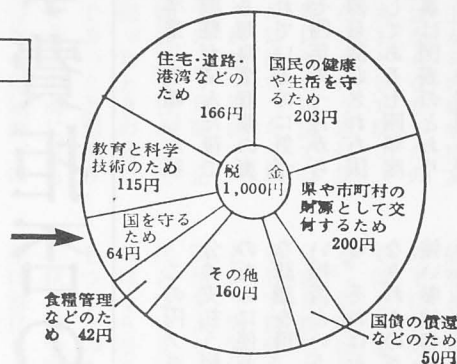
会員の軍事費拒否をする時の想いは様々である。

私のような給与所得者は還付請求しても軍事税は戻ってこない。戻る場合は次頁の図表①から④に決められてあることだけで、自衛隊は違憲



なのに、税法はその違憲の自衛隊を増強させるための金銭を国民からとり立てることを保障しているのだ。この矛盾を、われわれはもつと追及

しなければならない。  
軍事費の全体予算に占める割合はここ数年減ってきている。七四年・七五年が六・四％、七六年が六・二％、七七年は五・九％だった。



- ① 災害や盗難などにより住宅や家財に損害を受けたために雑損
  - ② 多額の医療費を支払ったために医療費控除を受けられる人
  - ③ 住宅を新築したり、新しい住宅を購入したために住宅取得控
  - ④ 寄付金控除や配当控除などを受けられる人
- くわしいことは、税務署におたずねください。

### あなたの納めた税金のゆくえは？

あなたの納めた税金  
1,000円は、右図のよ  
うに使われています。  
(昭和49年度予算)

しかし軍事予算・そのものは毎年増大し続けており、来年度は二兆円を越すと言われている。これはざっと計算して国民一人当たり二万円という額である。黙認できる数字ではない。

軍事費拒否という、極めてさやかな行動ではあるが、やってみて気がついたことは限りなく多い。軍事費拒否運動は実に途方もなく様々な問題を明確にする運動である。紙面に限りがあつてここでは詳しく述べられないが、とにかく誰でもできることなので、是

非多くの人が行なうよう呼びかけたい。  
なお最後に付け加えておくが、七六年度以降、源泉徴収票の裏から、例の円グラフが消えてしまったという事実がある。

良心的軍事費拒否の会  
連絡先・日野市旭ヶ丘2-35-18  
電話〇四二五-八三二七七八五六  
代表者・オーノ ミチオ

## 反基地闘争の現場から

この地に自衛隊が強行進駐して六年、すでに陸上自衛隊立川基地の存在は既成事実と化している。そして、関東地域の米軍基地を集約化した隣接の横田基地とともに、日・米共同作戦体制がより一層深化する段階にある。

立川基地の東側の部分は、戦前に一万機近い軍用機を生産した軍需産業立川飛行機(石播系)に返還され、西側部分は、天皇在位五十年を記念する昭和記念公園の予定地である。かくて自衛隊は、中央に位置して軍産・天皇を左右に抱えた理想的な体制を完成しようと、基地は昨秋米軍から返還されたが、この十月下旬、政府が公表した跡地利用案はまさにこのことを裏づけている。そして、地域住民を軍隊のもとに組織するあ

の手この手の策謀が日常化しているのである。  
「策謀」は一つには行事の形をとる。数千の子どもの鼓笛隊を先導にオープンカーに乗った市長、観光協会・商工会の会長・ミス立川が基地内に華々しく行進するパレード——それをハイライトとする基地内市民祭は例年のものとなった。町内会の夏祭りへの自衛隊音楽隊の出演、各種スポーツクラブへの指導者派遣、子どもたちを基地内に招待して開かれるチビ子ヤング大会等も年々盛んになっている。そしてその傍らには、かならずつき添う父親・母親たちの姿があるのだ。米軍占領時代に行なわれたこの種の行事は、私たちの少年、少女時代に甘いキャンディーの味と若干の苦い屈辱感とを残したものと



立川基地を監視するテント村

だったが、今、それは堂々と日本の防衛・地域の防災の名において、住民に受け入れられていくか見える。  
有事(＝戦時)立法が取沙汰される現在、策謀は緻密さを増して、軍中心に行政組織を再編する方向を目指すに至っている。それに、呼応する地域の側からの官製の運動が民衆を

と誘致促進の委員会に参加してゆく腰だけぶりだ。今年六月の市議選では、勝共連合が大挙してのりこみ、共産党に集中砲火を浴びせた。だが一方の共産党は「勝共連合は、韓国に日本を併合しようとしている。日本人に韓国語を強制しようとしている」と排外主義的な危機感をあおって、

巻きこんで生まれていることが、事態の重大さを特徴づけている。

きっかけは昨年の夏にはじまった天皇公園誘致署名運動だった。自衛隊の進駐完了以降、白紙の基地跡地地図「地元素」の夢を描くことでお茶をにごしてきた杜・共は、完全にこの動きにのみこまれた。共産党は「天皇公園でもよい。良い公園に作りかえよう」と言い、地区労幹郎・社会党は「基地より公園を、情報を得るためにも参加の意義あり」

それに応えていた。現在展開されはじめている勝共連合を手足とする自民党の「自衛隊・警察・消防・市当局による災害対策群団設置要求署名」が、時代を先どりする本命というべきか。国家権力が歴史を偽造し、戦時を美化する時代は、着実にこの地に反映されている。たとえば、最近こんなことがあつた。新聞折りこみで各戸配布された青年商工会議所の機関紙が「日米交流のあつた明るい基地のイメージアップ」をうたったのである。青年商工会議所幹部の母たちは、戦前は警防団・国防婦人会の幹部であり、戦後は米軍将校夫人らと華

## 自衛官合祀拒否の訴訟から

「自衛隊らによる合祀手続の取消等請求事件」の結審が去る九月二一日山口地裁で行なわれました。原告は中谷康子さん。「事故死した夫の護国神社強制合祀はいやだ」という良心の叫びの裁判です。

自衛隊盛岡地方連絡部釜石出張所長だった中谷孝文氏は一九六八年一月二日、自衛隊ジープに同乗中、対向中の民間大型トラックと衝突、即死されました。知らせで康子さんは

やかな接待外交を展開した日なたの人々である。その息子たちの記憶が歴史を偽造して復権しようとするとき、私は、数千数万の若い日本の女たちがGIと結んだ、不幸で深い交流の歴史を掘りおこさねばならないとつくづく思う。軍事基地周辺で典型的に進められている住民の生活・意識総体の統合の攻撃に対決していくには、日本とアジアの歴史の教訓を掘りおこし、現下の攻撃の真の意味をとらえかえして、正面から民衆に訴えていくことがまさに必要である。

(立川自衛隊監視テント村 加藤克子)

釜石市の病院にかけつけましたが、通夜も遺体引き取りも拒否され、遺体は自衛隊岩手地連に運ばれ、遺族疎外の部隊葬が行なわれました。

康子さんは、いったんは山口県の夫の生家に身を寄せましたが、「家」における「嫁」の地位にいたたまれず自立生活に入り、三年後によく山口市立老人ホームの調理員の職を得ました。そして、結婚前年の一九五八年に受洗のクリスチャンとして、



母教会の信愛教会で夫の追悼会をし遺骨は教会の納骨堂におさめました。故人は無信仰でしたが、妻の教会生活を理解し、助けていたのです。

ところが事故死から五年目の一九七二年春、自衛隊山口地方連絡部から「公務中死亡した夫を護国神社に合祀するための書類を出すよう」通達がありました。しかし中谷さんは憲法が保障する信仰の自由を理由にはっきりと断りました。それにもかかわらず七月には山口県護国神社から合祀通知書が送付され、すでに四月十九日に殉職隊員二十七名の一人として合祀されていたことが判明しました。中谷さんの抗議に地連の事務官は「国のために亡くなったのだから忠臣と対等に扱われるべきこと、現職隊員の士気を鼓舞し死亡に誇りを持たせるために合祀したこと」等を明快に語ったといわれます。

こうした経過の中で中谷康子さんは一九七三年一月、山口地裁に、夫の合祀取消を提訴しました。この行動



中谷康子さん

の背景には、所属教会での学習活動がありました。日本基督教団は一九六七年「戦争責任告白」を公にして、第二次大戦下の戦争協力の罪責を告白し、さらに過去の罪を再び繰返すまいとの覚悟を表明しました。同じころから靖国神社国営化推進の動きが活発になり、これに反対する署名集めや学習会、平和行進などが行なわれ、康子さんも積極的に参加していました。

九月二二日の結審で中平弁護人は「憂うべき政治状況」を指摘、この裁判は重大な憲法訴訟であり、憲法を生かす判決を願いたいと述べ、最後に九月一九日の朝日歌壇の一首を吟じました。徴兵はいのちをかけても阻むべし 母、祖母、おみな牢にみつるとも(石井百代さん 七五才)

戦後三三年の今、台湾・韓国・朝鮮など旧植民地の戦死者の遺族に、靖国神社の合祀通知書が送られていきます。赤紙一枚で戦争に狩り出し、日本国籍消滅を理由に、一銭の戦死補償もなしに白紙一枚で処理しているのです。まさにこの中谷裁判と同じ質の合祀問題といえましょう。

(自衛官合祀拒否訴訟東京支援会)

中川正子

### 裁判の速記録から

殉職者を護国神社へ合祀するということを、初めて聞いて何と答えられ

## 韓国被爆者救援のために

片すみの一主婦が「韓国の原爆被害者を救援する市民の会」という全国的市民運動の責任者という重い任を負わされるようになって、はや七年近くなります。気が遠くなるようなこの運動にかかり続けてしみじみ思いますことは、これは決して一個人のがんばりや努力でなく、多くの人の折りと具体的助けによって支えられてきたということです。「被爆者なら日本にもいるのに……」という声もあります。なぜ、私が韓国の被爆者に関心を持つようになったかと申しますと、今から十数年前、私の信仰の恩師、政池仁先生(聖書の日本誌主筆)から、韓国におられる先生の無二の親友をご紹介いただき私と韓国はもはや、切っても切れない間柄となっていたのです。そして幾度か開かれた関東地方での「韓日友和セミナー」に欠かさず出席して、

それまで全く知らなかった韓国と日本の関係がひとつひとつ明らかにされて、すっかり打ちのめされてしまいました。過去三十六年間にわたる日本の植民政策により、一方的な武力をもって、王・土地・米・生命・言葉・



李在任さんも被爆者の一人です。

ましたか。

私は突如に、私はキリスト教を信じておりまして、夫の遺骨は教会の納骨堂に納めていたのだいておりますし、年に一度の永眠者記念礼拝にも、記念会にも出席しており、まですし、ほかの宗教でお願いすることはできません、そう断りました。

合祀を拒絶したわけですね。

はい、もう一つ、それと同時に私は護国神社と聞きますと反射的に、これは靖国法案に関係があるんじゃないか、そういうことも感じまして、そのことも確かに断ったと思います。

それで、又、合祀の通知が来ましたね。これを見て、あなたはこういう気持ちになりましたか。

私はあれだけはっきり断っておりまして、まさか、という驚きと、また自衛隊に騙されたのか、裏切られたのかという思いと悲しみです。それから、そういうものが一度に体中を走ったような気がいたします。ご主人との関係では、どういうふうに思いましたか。

夫の死の意味というものが何であつたかということ……これからは本当に更に真剣にそれらを深く考えてゆきたい、そういう思いで……信仰生活に励んできたつもりでございます。当然夫の追悼は私がすべきであるというふうに思っております。

教会の集会であなただけは靖国問題を学習していたわけですか。

はい。それから私どもの教会員で

言でもおわびしたい思いでいっぱいでした。

なぜ、韓国人が日本で被爆したのか? 偶然、遊びに来ていて出くわした災難ではない、あの恐るべき「七奪」のゆえに、日本の政争政策の一端を担わされて被爆し、敗戦と同時に「外国人」として無視され、辛うじて祖国に帰ったが、病名も治療法もわからず、病苦と生活苦にさいなまれつつわが身の不運を嘆き、日本を呪いつつ、次から次へと死んでいった

### 二万人といわれる被爆者たち——韓国での取り組み

推定二万人という韓国の原爆被害者に対して、日本政府は、この問題は日韓条約の締結によって既に解決済みであり、個々の請求権は認められぬという態度をとっている。

一方、韓国政府もまた、何らの具体的な施策を示していない。韓国でこの問題にとりくんできたのは、被爆者自身によって組織された韓国原爆被害者協会(一九六七年設立、旧称「被害者援護協会」)のみであり、一九七〇年代に入ってから、この忘れられた犠牲者の問題を初めてとりあげたのが、教会女性連合会であり、また女性ジャーナリストの朴秀霞さんである。

教会女性連合会は、韓国国内で一口

のです。本当のところはなかなか、わかりませんが、推定では今なお二万人の被爆者が、日本で受けた二重、三重の深傷を抱きながら、一日一日を絶望的な状況の中で生きながらえているのです。この人々とともに生きたい願いを持ち続けてきたのです。

(松井義子)

次々に起こる世の出来事のかげで、ともすればかき消されそうなる韓被爆者の呼び声に耳を澄ませつつ、心ある皆さまと、ともども、ささやかな歩みを続けてゆきたいと存じます。

むすこさんを戦争で亡くされたお母さんでございませうけれども、本当に二度とこのような悲しい母親を作つてはならないという、靖国法案の反対署名運動を、一生懸命になさっている方があります。その姿を見て、本当に打たれました。あなたはそういう学習の体験の中で靖国神社あるいは、護国神社についてどういうふうな思っていましたか。先ほども触れましたけれども、やはり国がその死を、国のために死ぬることを美化して犠牲者を出すということ、ましてや、靖国神社や、護国神社が、戦死者を美化して作り出す役割を、また夫がこの死を利用して、その軍国主義復活への精神面での力を貸すのではないかと、そういうような面も許すことができません。

一九七七(昭五二)年二月二二日 山口地方裁判所 原告本人の証言より——原告 中谷康子

……私は以前に主人にすがつて思いきり泣きたかつたという個人的感情だけで悲しんでいるのではありません。あの時の悲しみに加えて、もっともつと重大なことを今感じているのです。憲法に保障されている信教の自由は、何人であろうと奪うことはできないはずで、この事件は個人的な小さなことから発生しました。しかし現在では私だけの問題ではなく、合祀とり上げ実現まで、このことを通して、日本の国が個人を尊重し、ひとりびとりが自由にまた平和な生活が送れるようにと願っています。

一九七三年二月一日 中谷康子



## 侵略戦争を伝える参考資料

- ☐『軍国主義』 世界の教科書を読む会 合同出版 1971年
- ☐『教科書を考える』 日本基督教団全国教会婦人会連合編 日本基督教団 1973年
- ☐『ぼくらの太平洋戦争』 本多公栄著 鳩の森書房 1977年
- ☐『太平洋戦争と教科書』 家永訴訟支援市民の会編 思想の科学社 1970年
- ☐『君が代通信』 亀山利子著 筑摩書房 1978年
- ☐『テルの生涯』 利根光一 要文社 1969年
- ☐『祖国への反逆と愛』 澤地久枝『別冊経済』評論 1972年冬
- ☐『長谷川テルへの旅』 澤地久枝『文芸春秋』1978年11月号
- ☐『中国の日本軍』 本多勝一 創樹社 1973年
- ☐『中国の旅』 本多勝一 朝日新聞社 1972年
- ☐『1億人の昭和史』 毎日新聞社
- ☐『女と天皇制』 婦人民主クラブ
- ☐『銃後史ノート』 女たちの現在を問う会

## ファシズム下の女たち

### 西ドイツの聞き書きグループ

ナチ統治下のドイツ女性についての研究は従来、皆無に等しかった。一方では単なる子産み機械と扱われた憐れべき女性像と、他方ではヒトラーが権力の座につくのに力を貸し、総統を見て感激のあまり失神、涙にあふれて歓喜の声をあげるヒステリックな大群としての女性像が一般的であった。しかし、これらは伝統的な女性観、先入観にもとづく想像で、実証的なものではない。

写真・いつの世でも「自然」の地位をあてがわれる女たち、一九三三年『女性と学問』ドイツ・一九七六年女の夏期大学記録集より



を分析した。一九三〇年までは、ヒトラーの国家社会主義ドイツ労働党に投票した女性は、男性よりもずっと少なかった、それ以後、支持票の男女差は次第に小さくなった。それでもヒトラー政権の契機となった一九三二年十一月の投票結果をみても、プロテスタントの多い大都市を除けばカトリックの地方では、女性の支持率の方が僅かながら低かった。ヒトラーを政権につけたのは女たちだとは言いがたいことを実証した。しかし女性有権者の四分の一が、ヒトラーが総統になるのに賛成票を投じたのも事実であった。

なぜ、女性たちが、ユダヤ人排斥、

反共主義とともに反フェミニズム的政策を次々と打ち出した政党に投票したのか。それには当時の女性を取りまく社会環境を考慮に入れなければならない。第一次大戦後のドイツでは核家族化が急速に進み、家庭は生産の機能を失って市場への依存度を高めたが、その一方で、女性の労働市場への進出も抑制されていた。長引く不況の中で、失業が女性に重くのしかかった。そして不況で家庭全体の収入が減った分だけ、家庭で女にまかされる無報酬の労働の量がふえていた。

(寺崎あきこ)

## ひろば

「アジアと女性解放」ありがとうございます。なかなか読みごたえがあり、勉強になっています。なぜアジアなのか？ わかりかけてきたようです。女大生にすぐさま参加したいのですが、なにぶん獄中にあることゆえ、行けないのがとても残念です。3・26の闘いから獄中生活はすでに七カ月を超えようとしているのに、学習は、女の解放についての意識を高めよう、と決めてみたものの、なかなか思ったように進みません。そういう中で「アジアの女たちの会」の活動を知り、どんなに心強く思い、また多く刺激されたかしれません。今は仲間のカンパにささえられて生息していますが、近い将来、保釈を勝ちとり、少しはお金持ちになったらカンパを送ります。ともに解放の日まで闘いましょう！

成田×××番(一才)

私が毎週日曜日に通っている教会で貴誌「アジアと女性解放」を知りました。アジアの女たちの会の性侵略グループに参加して、いろんなことを積極的に学びたいと思います。今年の夏、韓国でのワーク・キャンプに

参加して、特に韓国への関心を持っています。

今野初恵(東京・学生)

私たちは女ばかり九人が集まって八月一日、女の問題について書籍を集めた図書室を開室いたしました。私たちがほんとうに読みたい本の共同購入と共同管理を通じて、女たちの連帯を深めていきたいと思っています。現在では出資者は一名ふえて十名となり、会員は二十三名、8・9月中の貸出しは三百冊をこえました。狭い四畳の室は時に、訪れてくる人を交えての談話の場となっており、ます。通常の貸出しの他に月一回の合評会、通信の発行などを現在行なっています。貴誌をこの図書室に置きたいと思いますので、お送り下さい。

H・F・L・おんなの図書室(広島市)

たまたま新宿の模索舎で「アジアと女性解放」三号を買求め、読ませていただきました。そして、ここにもささやかな、それでいて、とした良心の灯をたやさずたくましく闘っている人々(とりわけ女性たち)のいることに、熱い感動を覚えております。悲しいかな隣国の朝鮮半島「韓国」をはじめとするアジアとの関わりは、あまりにも悪魔的な悪意と悲惨に満

ち、政治経済すべてを含んだ「日本国と民衆」の歴史と現状は血にまみれています。

私個人の無力感……ともすれば絶望感をふりいたさせてくれるいくつかの書物とともに、今、手にしているあなたがたの「アジアと女性解放」は、私に大きな(ただ大きいばかりではない)力と勇気を与えてくれるような気がしております。

あなたがたの限らない運動へおしめない拍手とともに、連帯を表明いたします。

伊藤和夫(調布市・会社員)

(前略)「アジア・女・通信」(会報)届きました。(会が)単なる紹介屋になってしまふのはイヤダノ、はその通りだと思っています。日本がこんなにアジアの中では群を抜いた大資本国になったというのも、つまりは労働者たちに力がなかったということだから私たちの運動はアジアでもっともおくれているといえます。金芝河氏の言われる「あなた方は、あなた方の国でできることをやれ」という言葉が身にしみます。

東一紡績とかバスガイドさんとかの支援カンパの窓口を開いておいで欲しいと発案します。

\* 斉藤葉子(京都・事務員)

## 反戦エスペランチスト 長谷川テル作品集

I 戦う中国で II あらしの中  
からささやく声 III 東と西と  
IV テルの思い出 く付 著作目  
録・参考文献・年譜 ●1800円

亜紀書房

東京・神田神保町2-9 (03)264・8301

たくさんのお便りありがとうございます。年齢や、職業もさまざまな方々、全国から励ましの手紙や問い合わせをいただき、専従、事務局もなく、機動力もないささやかな「会」に対する期待と拡がり、あらためて闘いのきびしさを感じさせられる毎日です。誌面の都合でみなさんからの便り、よびかけを載せられなくて本当に残念！息長くがんばりましょう。(五島)

## アジタート・マ・ノン・

トロツポ

(激しくかし過ぎずに)

黒沼ユリ子著

B6判二五四頁 二二〇〇円

## 女性解放とは何か

松井やより著

女性解放の問題を公害・福祉・技術・マスコミなど、社会との関係でとらえる。また先進諸国の女たちの思想を伝えるとともに、第三世界の女たちの苦しみと闘いに共感をよせる真摯な報告書である。

B6判二八三頁 二二〇〇円

未来社

東京都文京区小石川307 TEL (814)5521



# 東一紡織(韓)の女子労働者のためのカンパを

春から夏が過ぎ、再び冬をむかえようとしているのに、韓国の東一紡織労働組合の女子労働者たちの苦しい闘いは、今もつづいている。二六人の解雇された女子労働者のうち、あるものは獄中に、あるものは生活の場所を求めて、都市産業宣教会の関係の教会などに共に住み内職をしている。

去る9月22日には、キリスト教会館で、これらの女子労働者を中心にした祈祷会が開かれ、仮面劇を上演したが、この時にも警官が導入され、仁川都市産業宣教会の趙和順牧師ら

の逮捕者は、15日から20日間の拘留に付された。10月19日に釜山地裁で行なわれた「選挙法違反」事件では、5人の女子労働者が一年から8カ月の有罪宣言を受けている。貧しい家庭への仕送りまでしていた彼女たちは、今、自分たちが食べることすら容易でない生活に追い込まれている。

きびしい韓国の冬を迎えようとする今、解雇労働者たちのために、また、東一以外の会社からも解雇された労働者、獄中の人の家族のために、支援をよびかける。

宛先は「アジアの女たちの会」  
振替 東京〇〇四六二四三女子労働者支援と  
明記すること。カンパは韓国の対策委員会に寄託します。

## 編集後記

銃後の妻は、いまや資本の尖兵の妻として世界を巡る。侵略戦争の無反省が新たな侵略への無自覚的加担を生む。

繰繰さん、歴大な長さの座談会のテープ起こしご苦労さまでした。しかし載せられなくて残念。(竹林) 多くの人にかかわってもらいながら、紙面にいかしきれなかった事反

省します。まきこまれる女も「かりだされる女」もごめんです。侵略の歴史をストップさせよう。(とみ)

景気の低迷につれ、正義の価値は下落の一方。奢侈的生活のために死の商人の一員たることも恥じない風潮には憤激と不安の思いです(安江)

## アジアの女たちの会結成2周年集会 アジアの女性解放を目ざして

— 3・8国際婦人デーによせて —

集まりましょう!!

三月十日(土)二時~五時  
東交会館(国電田町駅)予定  
プログラム

\* 創作劇「東一紡織の女たちは闘う」(仮題)

\* アジア各国からの報告

\* 日本の女の闘いとアジアはどうつながるか

\* 歌、詩、スライド

\* 私たちの宣言  
参加費五百円

\* 交流会六時から

## 活動報告

### 女大生

- 9・20 戦争に荷担した女たち 加納実紀代さん
- 10・18 戦後教育と戦争 亀山利子さん
- 11・15 長谷川テルと中国 澤地久枝さん
- 12・13 パネルディスカッション

### 経済侵略グループ

- 7・6 高峻石『アリラン峠の女』著者の話をきく
- 9・28 今後の活動相談
- 10・26 韓国旅行の話をきく

### インドネシアグループ

- 7・26 「インドネシアのアルミプロジェクト」に
- 9・27 「中国旅行をして」
- 10・28 「韓国の『高麗独立青年党』」
- 11・30 「インドネシアの農業について」

### 資料収集グループ

- 7・26 金子文子『ナキズム』
- 9・29 中国の『ペラント運動』をみて
- 10・12 アジアの教科書にみる日本軍国主義
- 11・22 女性解放運動の課題

### 解放の美学

- 10・1 20世紀の芸術—政治の革命と芸術の革命
- 10・28 1930年代; ファシズム下でのヨーロッパの芸術とアジアの美術
- 11・2 政治危機とシュールリアリズム

### 日本の女たちの闘いに学ぶグループ

- 7・22,23 三里塚支援バザー
- 8・14 今後のあり方を検討
- 9・30 読書会『日本農業解体』
- 10・28 読書会

文遊社 東京都文京区本郷1-25-1

## 黄金の三角地帯

竹田 遼

● 全世界注目! ゴールデン・トライアングルに単身潜入した気鋭のルポライターのはんものルポ!  
● B6判並製二三八頁  
● 九八〇円(送料一六〇円)

## アジアを歩く 東南アジア編

日本アジア・アフリカ作家会議編

● アジアに首を突っこもうとする人々のために……おなじみの文芸者達が自ら歩いて確かめたアジアの切り口、読みごたえ十分の旅行記兼ガイドブック。  
● 執筆: 針生一郎・小田実・佐江素一・室謙二・芝生瑞和・三好徹・阿茶文彦・木村聖哉・有光健・内堀嘉典・長田弘・李恢成・内海聖子・吉岡忍・三留理男  
● 四六判上製三二〇頁  
● 一三〇〇円(送料一六〇円)